ネギま！ 黒き翼-ALA NIGRA-

燎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま！　黒き翼－ＡＬＡ　ＮＩＧＲＡ－

【Ｎコード】
Ｎ７２７１Ｋ

【作者名】
燎

【あらすじ】
最終回（？）更新しました。
続編（？）煌が執筆する小説『漆黒の翼』。ＵＲＬ　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７０６１ｌ／

どうも、燎の友人煌です。
燎と相談した結果、もう一人の友人からの様々な指摘もあったことから

この小説の設定を元に設定などの大幅な見直しを行い、
その後別の小説として出すことに決めました。
タイトルなどが決まり次第追ってここで連絡をします。
これを読んでくださっている皆様、
この場を借りて、私と燎ともに深く謝罪します。

黒き翼　－ＡＬＡ　ＮＩＧＲＡ－　修正前（前書き）

この話を根本から書き直そうと思うので、修正前を此処に。

黒き翼　―ALA　NIGRA―　修正前

主人公設定　　更新履歴

４月０５日　第壹話～第參話投稿
４月０５日　第壹話～第參話改稿
４月０６日　設定大幅改稿
４月０６日　第參話大幅改稿
４月０６日　第參話改稿
４月０７日　設定　仮契約カード　改稿
４月０７日　第肆話投稿
４月０８日　アーティファクトについて整理・改稿
４月１０日　第肆話　話を追加・改稿・誤字修正
４月１０日　第伍話投稿
４月１１日　第參話　話を追加・改稿
４月１２日　ご指摘を受け第參話修正しました
４月１４日　第陸話投稿
４月１５日　第陸話のネタばれ投稿
４月１６日　第漆話投稿　矛盾・誤字修正
４月１７日　第漆話　状況説明しようとするが、失敗した感が強い。
４月１９日　第陸話　エヴァのでるシーン改稿・追記

Ｎａｍｅ：コクロウ（黒狼　瑞希）
Ｎａｍｅ：ミズキ・Ｃ・Ａ・マクダウェル
年齢：享年１６　大戦時７　エヴァの姉時１２　本編１４
身長：元１６５ｃｍ　大戦時１１０　過去１３０　本編１５５
性別：女
属性：闇
二つ名：（英雄時）「千の呪文をもつ少女（サウザンド・スペル）」「闇の天使（ダーク・エンジェル）」
二つ名：（吸血鬼時）「童姿の闇の英雄（まおう）」
詠唱キー：リ・ラク・ラ・ラック・ライラック

【容姿】
白髪紅眼　エヴァにそっくり
２か所で一つに髪を纏めている
ｎｅｏ０１のエヴァのようなゴスロリ（？）

【身体能力】
筋力：Ｂ（Ｓ）
耐久：Ｃ（Ａ）
俊敏：Ａ（ＥＸ）
魔力：ＥＸ
幸運：ＥＸ
（）内は気・魔力で強化した場合、咸卦法なら上二つもＳ

【特殊技能】
・肉体変化（メタモルフォーゼ）
肉体年齢を変える。大戦時のデフォは７歳。

・魔眼
物の解析・魔術のコピーができる。

・気
気を使いこなせる。

・咸卦法
アスナより1歩上。

・超葱拳（ＥＸ）
前へ拳を突き出すことで、３つの爆発を起こす。

・永恆涅吉狂熱（エターナル・ネギ・フィーバー）
全身からテキトーに光線をだし、爆発を起こす。

・涅吉超大光波（ネギカイザー）
全身からビームを出す。

・術式再現
超電磁砲とか使えるかもしれない。

・リミッター
自分の魔力を半減させ、術式再現や必殺技系・聖ジョージの聖域等を封印する。
ネギの村を守れなかったミズキはこれを使う。

・狭間の空間
所謂四次元ポケットである。

・この世の真理
所謂錬金術である。

・魔法全般

ほぼ使える（要練習）
得意なのは闇・氷だが、
奈落の業火、千の雷、終わる世界などを使える。
また術式装填も得意とする。

・体術全般
おもに中国拳法とか。

・闇魔法
４個まで装填できる。（おわる世界・奈落の業火・千の雷）

・魔術作成
新しい魔術の研究。
（例）大地の怒りなど

【仮契約】
主１：テオドラ
主２：エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル
名前：ＣＯＣＵＲＯ　ＭＩＺＵＫＩ
称号：ＡＢＡＮＤＯＮＮＥＲ　ＬＵＳＯＲＡ（自由奔放な遊び人）
色調：Ｎｉｇｒｏｒ（黒）
徳性：ｓａｐｉｅｎｔｉａ（知恵）
方位：ｃｅｎｔｒｕｍ（中央）
星辰性：ｎｉｇｒｕｍ　ｆｏｒａｍｅｎ（黒い穴）
アーティファクト：絆のメモ帳

・絆のメモ帳
形状は手帳。中には仮契約カードの複製が入っている。
知っている味方のアーティファクトを模倣する。
攻撃をされた場合（攻撃系に限る）や３回以上見ればコピーも可能。

また、天狗之隠蓑など非戦闘系は知っていればコピーできる。
（カードはアーティファクトのみ描かれ、人物はかかれない）
形状は手帳。中には仮契約カードの複製が入っている。

この場合の模倣とは、効果のない見た目だけのものや効果の薄いものになることを指す。
（例）ハマノツルギはただの剣（前者）　千の顔を持つ英雄はあまり変化できないもの（後者）になる

増えれば順次追加を予定

第壹話　日常一反転　それでも日常

みぃ君が×んだ。

みぃ君が×されて×された。

いつもと同じ帰り道。

ひとつだけ違うのは、みぃ君と一緒じゃないこと。

明日のデートでは何を買ってもらおうかな、なんて考えてた。
そんな私の頭に響いてきた車のクラクション。
瞬間、呼吸　止まって。
怖い、逃げなきゃ、早く、でも、体が、動か…
「危ない！！」
彼が走り寄ってくる。
突き飛ばされた。
え？
そんな、嘘、だよね。
トラックが。
××君を。
×してた。
「み、い、君？」
ねぇ、何か言ってよ。
「みぃく、ん……ぅぁあ、あ、あ、あ〝あ〝あァあアア〝ァァ嗚嗚〝呼〝あ〝あアァ嗚ぁ――――――――！！」

すみませんすみません本当にすみません。
何か書きたくなって書きました。
誤字脱字などおかしいところがあれば連絡ください。
作者は心理描写や戦闘描写が苦手です。↑致命的

第貳話　日常ー反転　非日常

何処(いずこ)とも知れぬ闇の中、少年は目を覚ます。

「……知らない天じ……ょうどころか何も見えない、か」
目を覚ました俺が見たのは『闇』だった。
何もない無の空間にただ一つ俺が浮いている。
「いや」
違う。
足元に鎌を持った幼女がいた。
『……ません』
何だコイツ。
『…ません、……ません、…みません』
何を言っているんだ？
「なぁ、おい」
『…せん、ひゃぁっ！』
こえをかけたらおびえられたぜＨＡＨＡＨＡ☆

「何をそんなに謝っているんだ？」
とりあえずもう一度声をかける。
『怒ってませんか？』
何をだ？一応言っておく。
「怒ってないぞ、だから謝る理由を教えてくれ」
『じゃ、じゃあ理由を聞いても怒らないでくださいね？』
だから何なんだろう。
「大丈夫だ。怒らないから」
そう言った途端に彼女は突然元気になって、

こうのたまいやがった。

『えっとですね、私のミスであなたが死んでしまいました！』

は？イマ、コイツ、ナンテ、イッタ？
『テヘッ☆』
ブチッ。
何かが切れる音がした。
「何してくれとんだぁ～！このくそガキ～！！」
やつの首を絞める。
「俺にはまだやることがあったんだ！あいつとの約束もあったんだぞ！それを、お前が……」
オマエガ……。
いや、
それでもこいつは謝っていたんだ。
『ミス』がどんなものか聞いてからでもいいだろう。
「なあ、ミスって何なんだ？」
やつの首を話してそう問いかける。
『ケホッ、ケホッ、まぁ説明するとですね……

幼女の話を要約するとこんな感じだ。
本当はあの時ひかれるのはもともと俺で、そのあと奇跡的に助かるハズだった。
たがこいつが俺の彼女と俺の名前を逆に処理してしまい、結果アイツがひかれそうになり
それを助けようとした俺は死んでしまったということらしい。

「じゃぁアイツは無事なんだな」
そう確認する。
『はい、あの子はかすり傷で済んでますよ』
そうか、
「良かった」
思わずつぶやく。
『優しいんですね』
俺が？まさか。
「何を言っているんだ？俺はお前の首を絞めた男だぞ？」
そんな俺のどこが優しいというんだ？こいつは。
『それでもです。』
生き返らせろ、とかの前に人の心配をするなんて
、とこいつは続けた。
ん？チョットまて。
「いま生き返らせるといったか？」
『はい、言いましたよ～』
と、いうことは
「俺を生き返らせてくれ。さっきも言ったがアイツが待っている」
俺はそう願うが
『それはムリですね～』
なぜだ？なぜムリなんだ。
『えっと、状況を説明しますと潰れてナポリタンとケーキを混ぜた感じになったあなたの死体のそばにあの子が座り込んでいる状況で

すね』
化〇語か？
『躰がトマトなことになっているとも言いますね』
やめてくれ。そして地の文に返さないでくれ
『とまあそんなワケで、あの状態の死体が動き出したらホラーですよね』
まぁそうだよな。
「それじゃあなんで俺は此処にいるんだ？」
『それは……』
幼女は鞄をゴソゴソとあさり、
パンパカパーン
『転生契約書～♪』
とＣＶ，大山のぶ代風にいった。
「……転生？」
そりゃ面白そうだ。
『はい、ミスをしたお詫びに別世界に転生できます』
「…賄賂？」
俺にはそう聞こえたが…
『ち・が・い・ま・す！お詫びです』
そうかそうか、賄賂か。
「ところでその賄賂で何ができるんだ？」
『だからお詫び…まぁいいか、ハァ』
ふっ、ついに諦めたか。
『説明すると、それにサインすることで転生できます♪』
「ふ～ん、じゃあこの『望み』っていう欄はなんだ？」
気になったところを聞いてみる。
『それはですね、１つだけなんでも望みがかなうというものですよ～♪』
そうなのか、じゃあ…
「死ね」

『ハイ？……ってムリムリそれはムリですって～！』
やっぱり、しかしなんでもって言ったのに…。
「なら１５個ぐらいに増やせ」
『え、いや、１つだけ……「ここで大声出したらお前の上司来るかなぁ？」
「お前のミスについてうっかりバラしちゃうかもなぁ」
上司云々ははったりである
「そしたらお前の立場はどうなるかなぁ？」
『上司』を思い出したのか幼女は顔面蒼白になってゆく。…おもしれえ。
『うぅ、わかりましたよう。１５個でいいです』
うん最初からそういえばいいんだ。
「じゃあ俺の願いは……

『ではいってらっしゃ～い♪』
願いを決めた俺へと笑顔でそう告げた幼女の顔がブレ、
いや俺自身がブレ……
落ちた。

「なんでこうなるんだぁーーーーーーーーー！！！」

そういえばあの幼女は天使か死神だったのだろうか。

はい、もうワケがわからないです。
すいません、ほんとすいません。

第参話　落下ー激突　大爆発

やあ、変なバカ幼女の所為で死んでしまった元不幸な少年黒狼瑞希です！
現在絶賛紐無的急降下中だ！（中国風☆）
え？そんなことより『元』な理由を説明しろ？
そうだな、あれは暗き暗き闇の中だった……

「俺の願いは……これだ！」

1，身体能力をチートにしろ。
2，魔法全般を使えるようにしろ

３，そのための魔力をくれ
４，中国拳法などを使えるようにしろ
５，見た目などを自由に変えられるようにしろ
６，解析の魔眼がほしい
７，気を使いたい
８，　咸卦法を使えるようにしろ
９，他の作品の技がほしい
１０，何でも入る倉庫
１１，錬金術
１２，真魔法作成の技術
１３，翻訳機能
１４，アイツへの思いを保管したい
１５，行先は『ネギま』で

『う～ん』
幼女は俺の願いを聞いて唸り声を上げる。
思わず抱きしめたくなったのは内緒である。
「どうした？ダメなのか？」
『ち、ちがうよ！でもこれはかなり制限がつくけどいい？』
ああ、使えるなら何でもいいさ。
「平気だ。制限ということは一応平気なんだろう？」
『うん♪じゃぁ、どんな感じになるのか発表しまーす♪』

１，能力はある程度上がる。
２，魔法全般は練習次第、千の雷と奈落の業火はすでに使える。
３，中国拳法はクーの１歩上。
４，年齢を自由自在に変えられる。さらに狗族・鳥族の力も使える。
５，解析・魔術の模倣。
６，気は完璧。

７，　咸卦法もアスナより上。
８，他作品は一部ＯＫいまのところは超電磁砲だけ。
９，狭間の空間の使用許可餞別として漫画・小説が入っている。
１０，錬金術は手を合わせるだけ。
１１，魔法作成は、まあ頑張れ。
１２，翻訳はＯＫ。
１３，彼女への思いは思い出したいときだけ復活する。また、茶々丸のように記憶をフォルダに分けて保存できる。
１４，ネギまは了承（前世の記憶を完全に保ったままで）
１５，制限が多いので魔力だけは、ほぼ無尽蔵。しっかりリミッターをかけましょう。

『っとまあこんな感じです♪』
う～ん何か微妙なのもあるがこれでいいな。
『あっ、あと瑞貴君には女の子になってもらいます♪』
は？ちょいまて
「それはどういう…」
『理由は、新しく作るからだがそのほうが作りやすいのと女性のほうが強い魔力に耐えられるように作れるからだよ♪』
そういうわけなら…
「ならそれでいい、か。だけどその体っていうのはどんな感じなんだ？」
『姿は白髪紅眼、容姿はエヴァちゃんに似てる感じだけど年齢とかはどうする？』
「そうだな……よし、年齢は７~８歳で服装はｎｅｏ０１のエヴァ、髪は邪魔になるから後ろで纏めてくれ。」
『はーいＯＫで～す。それからそれから、必要最低限のものはこのポシェットに入れておきましたからね♪』

「ありがとな！」
『ではいってらっしゃ～い♪』

俺へと笑顔でそう告げた幼女の顔がブレ、
いや俺自身がブレ……
落ちた。

……と、まああのバカ幼女のおかげで俺、いや私？
やっぱ俺でいいか。は女体化した上で絶賛落下中です。
よし落ちる間にもう一度姿を確認だ。
……顔は見えないけど髪は白くなってる。
服も黒いものに変わっているし、ちゃんと7歳ぐらいの姿になっている。
ポシェットに入っているコインなら超電磁砲も撃てるだろう。
戦闘の中に落ちたりした時のために一応準備しておこう。
『食事中失礼！』
ん？なんか下の方から声が聞こえるなぁ。って此処じゃぶつかる！
『俺は放浪の傭兵剣士！ラカン・ジャッ「「ドゴォォウウン」」
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

あの日は各自好きな材料を持ち寄り、詠春お得意の鍋を食すことになったのですが……。
その内容を音声のみでお送りいたしましょう。

「おーいみんな！ちゃんと材料持ってきたか？」

「オウ！俺はその辺で狩ってきた大トカゲの肉だ！！」

「私は新鮮な有機栽培の野菜を持ってきましたこの、今朝採れたての葱なんか鍋にはぴったりですよ」

「葱かぁ。俺、葱は食えるけど芯はだめなんだ、芯は。あっちぃしな」

「ちなみに俺は最高級の豆腐ってやつを持って来たぞ。これは旧世界でもヘルシーな食材として親しまれている」

「わしは其処等に生えていた茸を持ってきた」

「よし。なかなかいい食材が揃ったな。では、ここからは旧世界随一の料理人、詠春にお任せあれぃ！」

「フフフ、此の鍋ってやつたまんねぇんだよなあ」

「おいナギ！前にも言ったが肉を先に入れるなよ！」

「へいへい、分かってますよ料理人詠春様」

「フフッ、詠春のように鍋にうるさい人間を日本では『鍋将軍』と言うそうですね」

「ああ～、我慢できねぇ！えい！」　ポチャン！！

「「あ」」

「肉を入れてしもうたのぉ」

「ナギ！おまっ、何肉を先に入れてんだよ！！あれほど言っただろう！」

「い～じゃねえか。食いたいもんから先に入れりゃあよう！」

「じゃあ私も」　ポチャン

「ではわしも」　ポチャン！

「だからもぉ～！！って、なんか変な茸浮いてるし！！鍋にはそもそも火の通る時間差というものがあって…」

「こりゃぁ旨いや！」

「うむ。実に旨いのぉ」

「やはり鍋は最高ですね」

「って何処がだ！！俺の大事な鍋を滅茶苦茶にしやがって……クウゥゥゥ！」

「泣くなよ詠春」

「これが泣かずに居られるかぁ！！」

「のぉ詠春。旧世界の寿司ってやつはないのか？」

「え、寿司？」

「詠春のことですから抜かりはないでしょう」

「もちろんだ！ちゃんと鮮度のいい魚を持ってきてる。魔法世界じゃ生で食える魚は貴重だからな！」

「お、これだな」　ひょい

「それは…」　ポチャン！

「ってあぁぁぁぁぁあ～！！寿司を鍋に入れるなあぁぁぁぁぁぁ！」

「ハァ？何で入れちゃいけねぇンだ？」

「いまのは生食用って言ってなぁ、生でも食える鮮度のいい魚なんだよう！！」

「うるせえなぁ、何だって良いだろ食えりゃあ」

「そうそう、其れで良いではないか」

「でも、さすがは生で食べれる魚。鍋に入れてもおいしいですね」

「うむ。最高じゃ」

「って貴様らってやつぅぅぅ…ウゥゥゥゥゥ～」

「さあ、詠春もあったかいうちに食え」

「うぅぅぅぅ、ぅぁあぁぁぁぁぁ～！こうなったらやけ食いだぁ！」

と、まさに詠春が鍋に箸をつけようとしたその時。

ドガッシャ～ン

「な、なんだ！？」

「食事中しっつれ～い！俺は放浪の傭兵剣士！ラカン・ジャッ「「

「あ」」」

どごぉぉぉぉぉぅん

あたりに轟音が響いた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

おれは最強の魔法使いナギだ！
今日は詠春のトコの料理『鍋』とかゆーのを食ってたんだけどよ、
いきなりどでけえ剣がとんできてよぉ詠春に鍋がのっかってんの。
おもしれえこともあるもんだよなぁ。
んで、とんできた方向から声が聞こえてきてさ、
「食事中失礼〜〜ッ俺は放浪の傭兵剣士！」
とかいうわけだよ。
案の定詠春がきれて立ち上がったところで、
今まで以上におもしれえことが起きたんだよ。
何だと思う？
それがなぁ、
お師匠さん曰く『バカ』が名乗ろうとした途端に、
あのバカ、空から降ってきたガキにつぶされてやがんの。ハハッ、
いい気味だ♪

しかし、

次の瞬間俺の笑いは止まった。

やつが始動キー無しで唱えた呪文、それは

「うわぁっ『百重千重と重なりて（ヘカトンタキス・カイキーリアキス・）走れよ稲妻（アストラプサトー・）千の雷！！（キーリプル・アストラペー）』」

俺が苦労して覚えた上位呪文、

『千の雷』

だった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

はい、絶賛落下中だった瑞希です。

あのあと押しつぶしたはずのラカンが跳ね起きてさ、

あんまり驚いたもんだから

「うわぁっ『百重千重と（ヘカトンタキス・カイ・）重なりて（キーリアキス・）走れよ稲妻（アストラプサトー・）千の雷！！（キーリプル・アストラペー）』」

『来たれ（アギテー・）深淵の闇（テネブラエ・アビュシィ・）

エンシス・インケンデンス・
燃え盛る大剣
エト・インケンディウム・サギニス・ウンブラエ・
闇と影と憎悪と破壊
イニミーキティ・マルタ・オディオ・エ・ニス・
復讐の大焔！！
インケンダント・エト・メー・エト・エウム
我を焼け　彼を焼け
シント・ソームル・インケンデンテース・
そはただ焼き尽くす者
インケンディウム・ゲヘナエ
奈落の業火！！！』っと！」

って感じでナギとラカンの最強呪文を唱えたらラカンが吹っ飛んじゃった。テヘッ。

……なんか俺性格変わったなあ。まあ性別が変わったんだけどさ。

そしてまあ何だかんだあって、ラカンが仲間になったぜ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

呪文を食らったラカンが復活するあたりからもう一度暫らく音声のみでお送りします

「なにすんだテメェ！」
「いきなり跳ね起きるのが悪い！」
「なんだとぅ、やるか？」
「受けて立つぜ！」
「へっ、標的はこいつ等だったがもう如何でもいい。女だからって容赦しねえぜ！」
「おっ！なんだなんだ？面白そうじゃねぇか。俺も入れろよ」
「おいナギ！」
「いいじゃねぇか、鍋将軍だって鍋のことで怒ってただろ？」
「それはそうだが…」
「オイオイ来ねえのか？それじゃ、こっちからいくぜ『羅漢適当に右パンチ！！』」

ドゴォォォォウン
「いよっしゃ、のってきたぜ！『千の雷！』」
ズズゥゥゥウン
「二人とも五月蝿いっ！『超電磁砲！』」
パリパリパリ、ピシューーゥゥン、……ズドォゥゥゥゥウン。

……
「お前すげえな。俺はナギ！お前俺たちの仲間にならないか？」
「いいぜ。俺はコクロウだ。」
「俺はラカン。依頼なんてどーでもいい！面白そうだから俺も一緒に行くぜ！！」
「オウ！よろしくな！コクロウ、ラカン！」
「（さっきまで戦っていたのに何なんだこいつらは。特にこのコクロウと云う奴）」

こうして紅き翼のメンバーが増えていった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そしていろいろあってやってきましたグレートブリッジ奪還作戦！
俺たち、特に戦線からはずされて鬱憤が溜まっていたナギは暴れに暴れた。
ラカンの斬艦剣が敵を墜とせば、ナギの雷が薙ぎ払い、そして俺の氷が押し潰す！
そんなこんなで俺たち紅き翼は戦線復帰とともにその名声を世界に轟かせた！！
（此の戦いでの戦いぶりから闇の天使（ダーク・エンジェル）と呼ばれるようになるが、此処では割愛する。）

その後も暴れまわったおれたち赤き翼だが、
ガトウやタカミチが仲間になり、少年探偵団の活躍によって秘密結社完全なる世界の存在が明らかになったことにより大変なことに巻き込まれてしまう！！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

すいません、本当にすいません。
ナギとかの性格よくわかりません。
千の雷がナギオリジナル云々、修正しました。
戦闘描写とか苦手なんで紅き翼の活動とかも削りました。
それからラカンですが何度も戦わずに、ナギとコクロウの強さをみて一度で仲間になりました。

鍋の時ガトウとタカミチいなかったんですね……
途中で気づいて書き直したため、違和感が残りました。
おもにガトウ⇒詠春・ゼクト　タカミチ⇒アル　です。

第肆話　襤褸小屋ー錬金　仮契約

「ガトウやタカミチなどを仲間に加え、
大陸各地で活躍していった紅き翼、
やってきたのは連合首都
引き受けたのは協力要請
そして日常と戦いが並行する日々。（都合によりほぼカットし次へ
進みます）
黒き翼ーＡＬＡ　ＮＩＧＲＡー始まります」

「コクロウ。お前は誰に向かって話しているのだ？」
「コクロウに何を言っても無駄ですよ、詠春。」
む？失敬な、アル。
これでも生前は聞き分けの良い子として通っていたんだぞ。
…嘘だけど。
「そんなことより首都まで呼び出した要件を言えよガトウ」
「そうだな、確かにコクロウにかまっている暇はなかったな」
ちょ、詠春。それはヒドイって。
「あってほしい人がいる。協力者だ」
「協力者？」
お、この流れは…
『そうだ』
「マクギル元老院議員！」
「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

やっぱり…そして現れるのは……
カッ　カッ　カッ
白いローブを翻らせ、一人の女性が近づいてくる。
「ウェスペルタティア王国……、アリカ王女だ」

こうして、冷血王女の協力要請を受けた紅き翼だが
マクギルを殺してなり変っていたフェイトの罠にかかり英雄から一転、
反逆者という烙印を押されてしまい逃亡生活に入った。
そんな中、首都に残してきた冷血王女が攫われたという情報を得る。
当然俺らは救出に向かった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

今からおよそ１０年前、はじめは辺境の些細な争いだった連合と帝国の戦いは
徐々にその規模を拡大していきました。
そんな中、我々紅き翼（アラルブラ）であるナギ・ラカン・詠春・ゼクト・ガトウ・タカミチ
そして私アルビレオとコクロウは完全なる世界、コズモエンテレケイアに攫われてしまった、
アリア姫を救出すべく夜の迷宮、ノクティス・ラビリントゥスへと向かったのです。

バギッ、ドガッ・グワッシャァァァァァン

「よおっ、来たぜ。姫さん」
「テオドラもいるな？」
テオドラ？帝国第３皇女でしたか、しかしなぜ此処に。
「遅いぞ我が騎士」
「久しぶりじゃな、ミズキ」
ミズキ？まぁ今はアリカ姫がいただけで良しとしましょう。
「へっ相も変わらず可愛げのねぇ姫さんだぜ」
「とか言いつつもこの餓鬼ったら、お姫様が心配で「急げ急げ」ってうるせぇのなんの！」
「よけいなことといってんじゃねぇ」　バキッ
「ってぇなこのぉ！」
「ああん？やんのかコラァ？」
とめた方がいいかと思い声をかけようとすると…
「此の愚か者が！」　パンッ！！
「ってぇ～」
アリカ姫の一撃がナギの頬に…あれは痛そうですね。
「痛がっている暇があるのじゃったら、とっとと私を抱えて逃げるのじゃ！」
「へぇへぇわかりましたよ。逃げりゃあいいんだろ逃げりゃあ」
あのナギが言うことを素直に聞くとは、やはりすごい人ですね。
「へっ千の呪文の男も、姫さんにかかりゃあ形無しだな」
「まったくじゃのぅ」
「一先ず王女殿下。我々の隠れ家へ」
「フム」
かくして我々は、アリカ姫を紅き翼（アラルブラ）の隠れ家へとお連れしたのです。
「ミズキとはいったい……？」
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「なんだ、これが噂の『紅き翼（アラルブラ）』の秘密基地か！
どんな所かと思えば…掘立小屋ではないか！」
「逃亡者に何期待してんだ、このジャリは。というか何でこいつも居るんだ」
「ヘラス帝国第三皇女テオドラ、アリカ姫との交渉のため出向いて来た所を捕縛されたようです」
「何だこの筋肉達磨！無礼であろう！」
掘立小屋ねぇ。確かにそうとしか見えないんだが。
『へっへ～ん、こちとらヘラスの皇族には貸しはあっても借りはないんでね』
ナギたちが誓いの儀だかをやってるからその間に作り直してみるか？……。
…まずは錬金で作りかえるとして……
『何ぃ？貴様何者だ！』
……魔法っぽくするために「リ・ラク・ラ・ラックライラック」を付けて……
…呪文は適当なこと言えばいいか……
……そうだ！どうせなら『アレ』やって一度ぶっ壊すか。
そうと決まれば……
「お～いテオ、ラカン。ちょっとこっち見ろよ！」

「貴様も無礼であろう！！」
というテオのセリフは無視（スルー）しました。
だがどうしてテオは俺のしたの名を知ってたんだ？

Side out

ラカンと皇女のやり取りを見ていると突然コクロウがラカンとその頭に乗っていた皇女に呼びかけました。さて、面白そうなので私も見ていることにしますか。
「いくぞ！よーく見てろよ！！」
そう言ってコクロウは我々の小屋のほうを向き……
『涅吉超大光波（ネギカイザー）！！』
ずどおぉぉぅぅぅんん
…全身からビームを放ちました。

Side out

「ハッハッハー！どうだラカン。これが俺の実力だ！！」
……あれ？反応がないな。やりすぎたか？
「いえ。皇女に首を絞められて気絶しただけです。まぁ皇女のほうは驚きで声も出ないようですが……」
ちょっ、お前は読心術師か！？
「顔に出ているだけですよ。それより今のは……」
そんなにわかりやすいか、俺。まあいい説明してやらないこともないからな。
「あぁ、今のはだな…「おいっコクロウ！我々の拠点に何ということを！」

詠春五月蠅いな。
「すまんアル、説明は後だ。…なあテオ、どんな家がいい？」
詠春は無視してテオの希望を聞く。
「そうじゃなぁ……。城じゃ、妾は城がほしい！…だがどうやるのじゃ？」
そうか、城か。それならレーベンスシュルト城あたりでいいか。
「こうするのさ！いくぞ『リ・ラク・ラ・ラックライラック来たれ土精風の精、集い来たりてわれに従え、レーベンシュルツ！！』」
パンッ
呪文は適等だが最後に手を打つことを忘れない。すかさず地に両手をあてて……
「出来たっ！」
見事なレーベンシュルツ城だ。うん。
今度こそどうだ、とテオを見る。
「……す……」
「す？」
また声が出なくなっているみたいだな。
「凄いのじゃ！！本当に城ができたのじゃ！」
「どうだ詠春、これで文句なしだろう」
言葉を失っている詠春を振り返る。
「……い…」
「い？」
お？何だ？
「いいわけないだろう！！この馬鹿が！！！」
「なんでじゃ、そちはこれでは不満なのか？」
本当に不思議そうにテオドラが言う。
「違いますよテオドラ様。ただ……」
「逃亡中なのであまり目立った行動はできないのですよ。と、いうことでコクロウ。
ぼろ小屋とまでは言いませんがせめて家サイズにして下さい」

笑顔で言うアルだが目が笑ってない。とても怖い。
「仕方がないな。……ほいっと」
「あぁぁ～」
とても残念そうなテオ。やめて！そんな目でこっちを見ないで！
「大丈夫ですよテオドラ様。一緒に居ればまた作ってくれますよ」
「そうか……決めたぞ！コクロウ。妾とぱくてぃおーするのじゃ」
はい？
「なんでさ…？」
思わず呟いてしまった。
「仮契約すれば守らなくてはいけなくなりますからね。そういうことでしょう」
「アルは黙っててくれ」
そういいアルは睨みつけておく。
『あぁっ、上目ずかいに睨みつけてくる少女！いいっ！！』
とか聞こえてくるがこれも無視する。
「で、そういう事なのか？テオ」
「うぅ、……そうじゃ」
う～むアルの気持ちが分かった気がするがこの状況では分かってはいけないのだろう。
「あぁ～まぁ何だ、ずっとは一緒に居られないがいいぞ。それに城ならいつでも作ってやるからな」
「ほんとかっ！」
「ああ、だから仮契約は…「そうか。なら早くやるのじゃ！！」
……。
「如何したのじゃ？」
「もう諦めたらどうです？コクロウ」
「ハァ。よしテオ、やるか」
もう如何にでもなれ、だ……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『……達磨！無礼であろう！』

「あのやけに元気な餓鬼がそうか」
「はい帝国の皇女様です。ナギさん」
俺の呟きにはタカミチが答えてくれた。だが…
「さん付けはやめろっていつも言ってんだろうが」
「す、すみません」
まぁ今はそんな事よりも是から如何するかが問題だな。
「おい姫さんやぁ、連合にも帝国にもオスティアにもあんたの味方は居ねぇ。どうすんだ？」
「そうか。……我が騎士よ、」
「だぁらその【我が騎士】ってのはなんだよ」
それに俺は【魔法使い】だぞ。
「連合の兵でない主は最早私のものじゃ」
な……
「世界全てが敵、じゃが主と主の仲間紅き翼（アラルブラ）は無敵なのじゃろう。いいではないか」
「あ、あぁ」
するとニヤリと笑い姫さんは続けた。
「対する我らは8人、じゃが千の呪文に千の刃、シンメイリュウ、そして何よりあの闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）と並ぶ小さき魔法使い闇の天使（ダーク・エンジェル）がいるんじゃ。だれにも負けはせぬじゃろう」
へっ、コクロウが一番強いような言い方は気にいらねぇが、
「そうだ。俺ら紅き翼は無敵だぜ！」
「ならば我らが世界を救おう！」

「「「なっ！」」」
「我が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ！」
…やれやれ、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。だが、
「いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」
姫さんが剣（つるぎ）を俺の肩に置く。
さあ！これから反撃開始だぜ！！

すいませんすいません。
書いていたらアルが壊れました。
相変わらずキャラのしゃべり方とかおかしいです。

黒「逃亡者として追われるナギたち。
新たに加わったアリカのもと、紅き翼たちはどんな活躍をするのか。
刮目して、次回を待てい！」
詠「だからおまえは何を言っているのだ？」

第伍話　前夜ー大戦　大戦

タイトルは『ぜんやーたいせん　おおいくさ』と読みます。
タイトルが早くもネタ切れだ……
だれか燎に文才を！！

我々紅き翼（アラルブラ）が目的を再確認したその夜、
コクロウを除くメンバーたちは皆何故か眠る気になれず、取り留めのない話を続けました。

此処からは音声のみでお送りします。

詠春　「にしても、アリカ王女も俺たちも帝国と連合両方を敵に回してしまったな」
タカミチ「僕たちに、勝ち目はあるのでしょうか」
ナギ　「へッ、勝ち目も何も、俺たち紅き翼（アラルブラ）は無敵だろ？」
アル　「フフッ、さすがはナギですねぇ。…しかし今度の戦いばかりは我々も苦戦を強いられるでしょう」
ゼクト　「何せ黒幕には完全なる世界（コズモエンテレケイア）が控えておるからのう」
ガトウ　「ということはこうして穏やかに過ごせるのもこれが最後かもしれないな」
ナギ　「辛気臭いこと言ってんじゃねぇよ！…けどお前ら、もし明日死ぬとしたら最後に何ししてぇ？」
ラカン　「ハァ、何言ってんだオメェ」
ナギ　「いやぁ、俺なら何するかと思ってな」
アル　「たしかに明日死ぬとしたら最後に何をしたいでしょう？」
一同　「「「「「「「「「う～ん（む）」」」」」」」」」

ナギ　「と、いうわけで『もし明日死ぬとしたら何をしたいですか～』のコーナー」
ラカン　「って小学生かお前は」
ナギ　「というかコーナーって何だコーナーって」
詠春　「いいんだよぉっ、たのしければさ。じゃぁまずは詠春からな」
ナギ　「え」
詠春　「さ～て、もし明日死ぬとしたらお前は何をしますか。ハ

イ答えた！」
詠春　「あぁ～、そ、そうだなぁ。俺なら多分最後の瞬間まで剣の腕を磨いているだろうな」
ナギ　「マジかよ」
ラカン　「これだから生真面目剣士はよォ」
ゼクト　「詰まらぬ男じゃのう」
詠春　「じゃぁ～、お、お前らは何すんだよ」
ナギ　「アル。お前は？」
アル　「そうですねぇ～。私なら…ハハハ、秘密です」
ナギ　「ってイミわかんねぇ」
ガトウ　「というか、気になる」
タカミチ　「気になりますよねぇ」
ラカン　「ちなみに俺はナギとどっちが強いか決着付けてぇ」
ナギ　「へっ、ど～せ俺が勝つに決まってんだろ」
ラカン　「こんガキャ～！だったら今すぐ勝負するかぁ？」
ナギ　「望むところだ」
タカミチ　「チョッ、ちょっと待ってください」
ナギ　「おっ、どうしたタカミチ」
タカミチ　「その～……ハッ、ちなみにナギさんなら如何するんですか？」
ナギ　「え　？」
ゼクト　「そうじゃのう」
アル　「聞きたいですね」
ガトウ　「言いだしっぺが答えるべきだな」
詠春　「ほ～ら～、何をするんだよナギ」
ナギ　「う～ん」
アル　「ハハハッ、いわずとも顔に書いてあります。ズバリ、あなたはアリカ王女とデートしたいんですね？あの時の約束のように」
ナギ　「なっ！テメェなんでそのことを！つーかどこで聞いたんだよ！」

ラカン　「ハッハッハ、やっぱオメェお姫様のこと好きなのかぁ。ありゃいいオンナだからなぁ？」
ゼクト　「ちなみにナギは姫と姫子ちゃんを連れて、三人で京都に行くつもりじゃったらしい」
ナギ　「そーそー、ってお師匠まで！何で知ってるんだよぉ！」
詠春　「ハハッ、京都かぁ、なるほど。それで俺に見どころをいろいろ聞いてたのか。貴様がお寺に興味を持つなど、おかしいと思ってたんだ」
アル　「ナーギー、私たちの目が節穴だと思ってたら大間違いですよっ」
ナギ　「ち、ちげぇよぉ。俺はただ…」
ラカン　「なんだいいわけか？」
ナギ　「くぅっ、俺は！姫さんも姫子ちゃんもずっと王宮しか知らなくて、窮屈な生活を送ってるから…なんつぅか…たまにゃー外の世界も見せてやりたいとか思っただけだ！」
一同　「「「「「「…………（え）…………」」」」」」
ゼクト　「愛、じゃのう」
タカミチ「えぇ、ナギさんって実は優しいんですねぇ」
ナギ（15）「うっせー！大人をからかうんじゃねぇ！このっこのっ！」　バシッ　バシッ
タカミチ「や、やめてくださいよぉ～ナギさん」
ナギ　「こんにゃろ～」　バシッ　バシッ
タカミチ「ギブ！ギブ！」
アル　「まぁ～でも、誘ってあげればきっと喜ぶと思いますよ。」
アリカ姫」
ナギ　「え」
詠春　「ホントに京都に来るなら、案内してやるぜ」
ナギ　「お、おう」
ラカン　「でもよォ、万が一お前が死んだらお姫さん悲しむだろうなぁ」

ナギ　「どうだかな。あの気の強いお姫さんのことだ。涙一つ流さないんじゃ……」
???　「誰が気の強い女じゃ？」
ナギ　「って、ぎぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ――――」
ラカン　「噂をすれば…」
タカミチ「アリカ姫のお出ましだ！」
アリカ　「ハァ、だいたいお主たちは此のようなときに何を下らぬ話をしているのじゃ！そんな暇があったら少しは体を休めんか！」
ナギ　「ってゆーか今の話聞いてたのか…」
アリカ　「聞こえたのじゃ」
ナギ　「聞いてたんだろーが！」
アリカ　「聞こえてしまったのだと言っている」
ナギ　「きたねーぞ！盗み聞き！！」
アリカ　「盗み聞きなどしておらぬ！」
ゼクト　「また始まったのう」
アル　「お二人は本当に仲良しですねぇ」
ガトウ　「ハァ、寝るか」
アル　「そうしましょう」

こうして我々紅き翼はその翌日から戦いの日々に突入したのです。

そのご我々は敵だと判断したものを倒していき、そうこうしているうちに徐々に味方も増えていきました。
そしてコクロウ曰く『映画なら3部作単行本なら14巻分はいくであろう』6ヶ月間の死闘のすえ、雑魚たちを蹴散らし敵の本拠地が王都オスティア空中王宮最奥部「墓守人の宮殿（ノクティス・ラビリントゥス）」であることを突き止めたのです。

しかしこのコクロウという少女、出会う前にも一度どこかで見たことがあるような気がするのですが……。まあ、今考えても仕方が

ないでしょう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「不気味なくらい静かだな」
「ええ、ですが油断はいけませんよ？」
「そんくらい分かってるって」
今俺たちはラストダンジョン「墓守人の宮殿」の前に居る。
戦いの前の最後の準備ってわけだ。
「ナギ殿！」
ん？この声は確か
「セラスか。準備はできたのか？」
「ハイ。帝国・連合・アリアドネー混成部隊、襲撃の準備が整いました」
「そうか、これで…」
「あっ、あの！」
「どうした」
「サ、サインを頂けないでしょうか！？」
「ああいいぜ、それくらい」
サインをしてセラスに渡してやる。
職権乱用？俺はそんなの気にしないぜ。
「それじゃ行くか！！」
「あ～ナギちょっといいか？」
なんだよ？コクロウ。いいところを邪魔しやがって。
「今回俺は中には入らないからな」
「どうしたんです？コクロウ。あなたらしくもない」

「いや、今回はちょっとヤバい気がするんでな」
「おい！コクロウテメェ逃げるのかよ！」
ラカンの言うとおりだぜ！何で一緒に居かねぇンだ？
「落ち着いてくださいふたりとも。おそらくコクロウは…」
「アルの言いたいこと。多分其の通りだ」
どういうことだ？
「さっきも言ったように今回は何か起こるかもしれない。だから混成部隊は温存しておきたいんだ」
「つまりコクロウが自動人形や悪魔たちを抑え、セラスさん達は万が一に備えるということですよ」
「それに闇の天使（ダーク・エンジェル）の所以となったアレや絆のメモ帳の強さも見たいしな」
「そうか。じゃあコクロウ、頼むぞ！
よぉし野郎ども！いくぜ！！」
「セラスさん。そういうことで頼みます。」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

よし、ナギたちは行ったな。こっちも始めるか。
「鳥狗解放」
一言呟く。
そして、俺の背中から黒い翼が生えてくる。
これこそが闇の天使の所以だ。
通常魔法使いが飛ぶときは身体強化で跳ぶか、杖などで飛ぶかのどちらかだ。
前者の場合は足場がなければ戦えず、後者の場合はバランスの問題で戦えない。

だが俺の鳥狗解放は鳥族の翼に狗族の力を加えることにより飛行・攻撃・防御を同時に行えるようになっている。
そして、
「来たれ(アデアット)」

Side out

ナギ様も凄いがやはりこのコクロウという少女も凄い。
ナギ様たちが飛び出した後、少女の背中から黒い翼が生えてきた。
そして飛び立った少女は……
「涅吉光波(ネギビィィムッ)」
目からビームを放った。
さらに少女が続けて詠唱を始めたのは
「リ・ラク・ラ・ラックライラック『百重千重と(ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・)
重なりて(アストラプサトー・)
走れよ稲妻』
「あ、あれはナギ様の!?」
『千の雷(キーリプル・アストラペー)!!』
サウザンドマスターの代名詞ともいえる千の雷だった。
驚きで声も出ない私。だが彼女の攻撃はまだまだこれでは終わらない。
彼女が次に放ったのは、
「『斬艦剣!!』」
ラカン様のアーティファクト、『千の顔を持つ英雄』を使った斬艦剣でした。
……もう何も見なかったことにしましょう

Side out

……

「『燃える天空！！』……チッ、やっぱり数が多すぎる。仕方がないここはアレを使うか」

確かやり方は、

「右手に魔力左手に気、合成！リ・ラク・ラ・ラックライラック！

『四元の精霊、光闇（こうあん）の精霊二百柱

集い来たりて我に従え！』

攻撃を止めた獲物（エサ）に悪魔が殺到する。

『炎よ！槍となりて敵を貫け！』

火蜥蜴の群れが辺りを焼く。
『水よ！霧となりて敵を欺け！』
攻撃の対象を見失った悪魔は混乱する。
『風よ！突風となりて敵を払え！』
戦女神たちがそれを吹き飛ばす
『土よ！壁となりて敵を阻め！』
岩の塊が辺りを飛び交う。
『開け！聖ジョージの聖域！』
空中に巨大な魔法陣が浮かび上がる。
『闇よ！凡てを飲み込む絶望となれ！』
空間に亀裂が入り闇がのぞく。
『光よ！凡てを照らす希望となれ！』
陣の中心に光が集まる。
『【神よ何故私を見捨てたのですか？】
神殺しの竜（ドラゴン・ブレス）の吐息！！』
亀裂から漏れだす紅き光と陣の中心の白き光、そして其れを飲み込

む冥き光。

三つの光が俺の前方に伸び……悪魔を喰らい尽くした。

よし！ほとんど潰したな。
あとはタイミングを待って…

ずぅぅぅぅぅん

うん、ナギたちは創造主を倒せたようだな。
それじゃ最後の仕上げだ！！

「いくぞっ！『永恆涅吉狂熱（エターナル・ネギ・フィーバー）！！』」

そして爆発が辺りを包みこみ……意識を手放しそうになる俺が最後に見たのは
俺を吸い寄せる闇の狭間と、敵のいなくなった空だった。

すいませんすいませんすいません。
やっぱり文を書くのは難しいです。

技説明
・鳥狗解放
肉体変化で翼と狗神を作り出す。
狗神を込めた羽などで攻撃。

・神殺しの竜（ドラゴン）の吐息（ブレス）
元ネタは禁書目録。
前半は、呪文で防衛を行いつつあふれた魔力で陣を描く。
後半は、竜の吐息のための呪文（オリジナル）

次は第参話を書き直す予定。
誤字・脱字・批評などありましたら……

第閑話　大戦ー終結　主役側

読む必要はあまりないです。

『ははははははは、私を倒すか人間それもよかろうッ』

『だが、ゆめ忘れるな』

『全てを満たす解はない。貴様も例外ではない』

「グダグダうぅるせぇえッ！」

「人…間を…なめんじゃ…ねえぇぇえーッ！！！」

ズド…ゥン！

……ドンッ！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『貴様には結局何も変えられまいよ』

『英雄よ、貴様も我が２６００年の絶望を知れ』

フォッ……

「グ…ぉ…お師匠…」

「師匠ォおおぉおぉ――――ッ」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「まさかあのゼクト殿が逝ってしまわれるとは…」

「コクロウも帰って来ませんでしたしね」

「アイツが死ぬわけねぇと思ってたが……
まぁ戦争だしよ他にも大勢死んだ」

「いや、お師匠は…」

「ナギ」　ポンッ

「死んだ奴らと世界の平和に……」

Side　out

こうして戦いは幾多の罪のなき民の犠牲と幾多の名もなき兵、
そして紅き翼（アラルブラ）のゼクトとコクロウの犠牲の上に終結しました。

紅の翼戦記
ＡＬＡ　ＲＵＢＲＡ　ＳＡＧＡ
ＥＰ１　完全なる世界の野望
＜了＞
＞ｉ６００３―９７４＜

いや、続くよ？

すいませんすいません。
めちゃくちゃ短編です。

誤字脱字・矛盾点などありましたらズバズバとご指摘ください

第陸話　ある意味閑話　エピローグにかわるプロローグは絶望に染まる。

今の一言　頭が、頭が割れるように痛い。

Ｓｉｄｅ　？？？

さて、此処はエヴァが暮らしていると思われる城の前。
どうやって介入する？
キャプテン！！教えて！
『考えろ。考えるのだ。さすれば理想郷（アルカディア）に辿り着けるだろう』
了解です！

……（思考中）

……（思考中）

……（思考ｔｙ「閃いた！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　エヴァ

ねえさまはどこにいるんだろう？
わたしはいまパーティのとちゅうでぬけだしたねえさまをさがしています。
このあたりにいるとおもうんだけど……
「あ！」

ねえさまはっけん！
「ねえさま～！！」　ぴょ～ん！
みつけられたことがうれしくておもわずだきついてしまいました。
いつもはみつけることもできないから。
「如何したの？」
「どうしたのじゃないよ、ねえさま」
そりゃあねえさまはいつもぬけだしているからきにならないのかもしれないけど、
「きょうはわたしたちのたんじょうびパーティーだよ。ねえさまもいっしょにいこうよ！」
「誕生日……そういえばエヴァは何歳になったんだっけ？」
「１０さい！…ねえさまとわたしはちょうど２さいちがいだよ？」
どうしてわざわざかくにんするんだろう？
「１０歳。……そうだったね。じゃあ行こうか」
「うん！！」
でもそんなぎもんはすぐにきえてしまいました。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ミズキ

結局認識阻害と記憶操作を組み合わせてエヴァの姉ということにして介入した。

私を探しに来たエヴァに連れられパーティに出席。
予想通りというか何というか、飲み物に薬が入っていたらしく二人仲良く眠ってしまう。

そして目を開くと……

「気分はどうですか？ミズキ様、エヴァ様」
「やはり貴様か」
昨日私たちに飲み物を進めてきた男だ。あの時点で少しは怪しいと思っていたが…
「はて、何のことやら」
こいつがエヴァを…
「一つ確認させてもらう。私たち二人を真祖にする儀式を行ったのは貴様か」
「…ッ！……ええ、そうです。お気に召しましたか？」
ああ
「最高だよ」
「そうですか。それは良かった。では…」
「だが貴様は最悪だ。死ね」　ズシャッ
エヴァを真祖にした、奴の体を切り裂く。
「エヴァ。起きて。逃げるよ」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　エヴァ

きっとあの誕生日から凡てが狂ったのだと思う。
ミズキ姉さまと私はあれから世界中をめぐった。
姉さまは凄い。
超電磁砲をはじめとして、錬金術・空間転移・瞬動・中国拳法・高位呪文・時間移動（仮）、さらには数百年前に私が編み出した闇の

魔法まで使いこなしてみせた。
そんな私たちは、
ときに正義としてときに悪として、様々な戦争(暇つぶし)・紛争に参加した。
その結果、私には６００万ドル姉さまには１０００万ドルの賞金がかけられた。
それでも私たちは一度も斃されることなく世界をめぐり続けた。
５０~７０年前には日本へ行きタケダソウカクとかいうへんなおっさんに合気鉄扇術をならった。
その間姉さまとずっと一緒だった
確かに楽しかった。
でも……

「どうしてだ！どうして連れて行ってくれないんだ！！」

「ごめんエヴァ。だけど今回は今までとは違うんだよ。とても危ないんだ」

何故だ？何故姉さまは一人で行くって言うのだ？

「本当にごめん。２５年。２００２年までにはエヴァの居るところに戻るから」

「本当だな？」

「うん、約束だよ」

「じゃあ絶対に戻ってきてよ！」

涙を拭いそう約束させる。
姉さまは最後に一つ頷くと何時も出かける時のような優しげな笑顔を浮かべ、

私の前から消えた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ミズキ

エヴァにまた嘘をついてしまった。
これから行く魔法世界はまだ大戦前だし、始まっても向こうの『俺』がいる。
でもエヴァにはまだ早い。
いくら吸血鬼の真祖でも向こうの世界にはもっと危険な奴がたくさんいる。
不意を突かれたらいくら私でも守り切れない。

「ハァ」
思わず溜め息一つ。
あの時、時間移動のためとはいえ最大威力で
『神殺しの竜の吐息（ドラゴン・ブレス）』
『永恆涅吉狂熱（エターナル・ネギ・フィーバー）』」
の連発を行なったのがまずかったらしく、『精神は肉体に引っ張られる』と
いうアレが現実のものとなった。
其れまでは如何やら無意識に魔力で押さえていたらしい。
溜め息の理由はそんな事ではなく、エヴァを守るのではなくエヴァとともに戦えば
向こうでも大丈夫だ。ということを隠し、嘘を吐いてしまったということだった。
是も嘗ての『俺』なら気になどしなかっただろうに……。

「私も弱くなったなぁ」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　コクロウ

「……ん？……此処は…」
何か長い夢を見ていた気がする。
１２歳ぐらいの少女と１０歳ぐらいの少女の二人旅の夢だった。
あの子たちはきっと……
「目が覚めましたか。コクロウ」

「アル？」
「ええ、そして此処はケルベラス無限監獄の近くに建てた我々の隠れ家です」
ケルベラス？じゃあまさか…
「もしかして今は１９８５年だったりするか？」
「その通りですよ。ちなみにナギたちはアリカ様を助けに渓谷へ向かいました」
「そうか……２年間で何があった？」

「１９８３年　９月２９日（木）我々紅き翼は帝国・連合・アリアドネーの協力のもと
完全なる世界および創造主の殲滅に成功。ゼクト殿とあなたの犠牲により世界は救われました。
その後１９８３年　９月３０日（金）連・帝両国が停戦合意して、離宮島で記念式典が開催されます。同日オスティアが滅びました。
この記念式典にてあなたとゼクト殿を含む４人がマギステル・マギになりました。
２ヶ月後アリカ王女が捕らえられ、処刑が決定。其れから2年、今日が処刑の日です」

「そうだったのか。…だが何で俺は此処にいるんだ？」
おそらくあの夢の中の少女は……俺だ。
「其れはこちらが聞きたいところですよ。準備が整いさあ出発だというところに突然貴女が現れたんですから。…其れはそうと貴女、ミズキという名に聞き覚えはありませんか？」
ミズキ・Ｃ・Ａ・マクダウェルと夢の中、いや数百年前の俺は名乗っていたな。
「賞金首のミズキ・Ｃ・Ａ・マクダウェルのことか？…其れがどうしたんだ？」
「いえ、ただ初めて顔を合わせた時にテオドラ様が貴女のことを「

ミズキ」と。
それからどこかで一度見た事が有る様な気がしていましたが最近になってまた彼女の目撃情報が上がっていることから思い出しましたが、数年前に見た彼女の手配書にそっくりなんですよ。貴女は」
「最近になって目撃されたのなら其れは俺じゃないな。おそらくこの2年間の中には俺という存在はこの世の何処にも存在していなかっただろうからな」
多分あの時に俺は過去へ行った「ミズキ」と現代に残った「コクロウ」に分離したんだろう。そして多分俺は未来へ飛ばされた。
魔力が全く感じられないことから推測するにこっちは本体ではなく、「ミズキ」が本体なんだろう。
「存在していない？其れはどういう…」
「悪い、何時か話すから今はミズキが何処で目撃されたのかを教えてくれないか？」
「え、ええ…そうですね。確か公の場に出てきたのは記念式典だったかと。式場で何度か目撃情報が上がっています。またその後も魔法世界各地に現れ、オスティア難民の救助や支援に当たっています」
「良い奴じゃないか。それ」

賞金首だとは思えない。俺の記憶では7年前にエヴァと別れるとこまでしかないからな。
判断はまだできないがおそらく俺自身ならば何かを守るために戦っているのだろう。
「ええ。げんに彼女は7年前に行方不明になったあとは賞金は取り消されています」
そうなのか。

「そろそろナギが帰って来るでしょう」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ミズキ

あれからも色々な事が有った。
テオドラにあったり、テオドラに懐かれたり、テオドラの記憶を封じて旅に出たり。
大戦、最終決戦の時のテオドラの前に行ったり、驚く顔を見たり、一緒に反魔法場を封印したり。
記憶を操作できるなら茶々丸のように記憶をデータ化、整理できるのでは？という考えのもと自分の記憶を操作してみたり。

そして現在、ケルベラス渓谷の底にて絶賛見学中。
あっ、アリカが落ちてきた。
「ナギ、ナイスキャッチ！」
「あんがとよ。……って誰だお前？」
「たぶん……ミズキ？」
「なんで疑問形なんだよ」
コクロウと名乗っていいのか疑問だったから？

「…ナ…ギ？…なぜ主が？」
「は～い姫さんが目、覚ましたみたいなんでとっとと逃げちゃってください！」
「一人で大丈夫なのかよ！まぁ、俺も一人で乗り込んで来たんだけどさ…」
「大丈夫、大丈夫♪ナギにできることで私にできないことはないよ」
というかぶっちゃけナギは邪魔なだけなんだよね。
「そうか。よし行くか、姫さん」

「ちょっ、まて！だからなぜ主がいるのかと……」
声が遠ざかっていく。
さらに上から爆音が聞こえるとこをみると
「もう始まってる、か」

よしこっちもはじめて、
そして終わらせよう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ナギ

姫さんを助けに入った時現れた、よくわからない謎の蝶の仮面の女。
魔法の使えない筈のあの谷底で、それでもアイツからは魔力が溢れていた。
渓谷の特性をもってしても抑えられない膨大な魔力。
そんなのは今までただ一人コクロウにしか見た事がなかった。
２年前から行方不明だったコクロウは、今日突然現れた。
姫さんを助けようとする俺たちの隠れ家の前、そこにあいつは倒れていた。
あの時、コクロウの体からは魔力をほとんど感じなかった。
だが仮面の女「ミズキ」から感じた魔力はコクロウのものと全く同じ感じがした。

奴はいったい何者なんだ？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　アルビレオ

我々は、再び彼女を失った。

アリカ様とアスナちゃんを救出すると、我々は京都へ向かいました。
ナギの希望であった京都でデートと、詠春の頼みであるスクナノカミ封印のためです。
アリカ様救出の折、仲間になりたいと言ってきた仮面の女性ミズキ。
彼女はコクロウを見て一瞬驚いたようだったけれど、それ以外は普通に我々になじんでいました。
ただ、仮面は外してくれなかったのが当時残念ではありましたが。
その後、一時期紅き翼は解散して世界中を回りました。
コクロウとナギがあの闇の福音を助けた時はさすがに驚きました。
その後、闇の福音はミズキがナギに教えた登校地獄をかけられ、麻帆良学園に送られました。
そして１９９３年我々はまずナギを失います。

トルコのイスタンブールへ一人で向かい、そして彼は連絡を絶ちました。
コクロウは魔力のほぼすべてを失っていましたが代わりに彼女しか扱えない新しい体系の呪文、メラ・ヒャド・ホイミというものなどを使いました。
彼女はナギが失踪すると、すぐにアリカ様の暮らす村へ向かいました。
なんでも災厄の王女の情報がいつ漏れるかわからない、またもうすぐ生まれるだろうその子供もまた
英雄の子供ではなく災厄の王女の忌み児という見方をされてしまうだろうとの事でした。

それから6年。

１９９６年冬　雪の日の夜、

あの日我々はＭＭ元老院の依頼で全員が魔法世界側に行っていました。

なにか重要な事を忘れている気がする。というミズキの言葉のもとに我々は村へと急いでいました。

そして

村に到着した我々を待っていたのは、

石化の呪文で足を失ったネカネさんと、

ナギの杖を握りしめたネギ君と、

永久石化をかけられたスタンさん達村の人々

そして、同じく石化した

彼女の姿だった。

呆然とする中で、
あぁ、結局後で話すと行っておきながらあの2年間の事、話してくれませんでしたねと、
漠然と
ただ漠然と思った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　コクロウ

自分が紛い物だということにはめを覚ましたあの時から気付いていた。
たしかにコクロウとしての記憶はあるがそれでも気付いた、気づいてしまった。
なんとなくだったその考えも、あの日ミズキという仮面の女を見たとたん確信に変わった。
ミズキがつけていた仮面、あれは華蝶仮面のものだった。
名前、容姿、仮面。性格は違ったけれど、おそらくアイツは何百年の時を過ごしてきたんだ。変わってもおかしくはない。
だが、自分が偽物だろうと精一杯やっていくつもりだった。

やっていたつもりだった。

やれていると思っていた。

現実はそんなことはなく。

体が動かなくなっていく中で、『ホンモノ』だったら巧くやっていたのだろうかと

思った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ミズキ

この日のため、この日のために今まで様々な技を駆使して、強くなってきたはずだった。

でも、間に合わなかった。

彼は、『俺』は、すでに物言わぬ石像だった。

身を守るために合気道を学んだ。

魔獣に対抗するために魔力を使わない『奇跡』を習得した。

人々を守るために剣を持つ腕を磨いた。

悪魔に対抗するために陰陽道を極めた。

全てはこの日の為だった筈なのに。

私は間に合わなかった。

あろうことか、

ＭＭ元老院の罠に嵌って。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　テオ

コクロウが死んだ。

妾をずっと守り、何時でも城を作ってくれると言ったのに。

何がダメだったのだろうか。

わがままを言った事？

仕事中に飛びついて邪魔してしまったこと？

町に何度も連れて行ってもらい、でっかくなったコクロウのかたに何時も乗っていた事？

わがままがダメならもう言わない。

仕事も邪魔しない。

自分の仕事をちゃんとやって、町にも行く回数も減らす。

だから、

だから、

「妾はさびしいのじゃ。」

「帰ってきてほしいのじゃ」

「コクロウ」

Side out

Side エヴァ

あれから19年がたった。

姉さまとの約束まであと６年。
きっと姉さまはこの現状から助け出してくれる。
約束を信じて一人で生きてきた。
でも１０年がたった時私は一度折れかけた。
崖から落ちたのも、折れかけた私がぼうっとしていた所為だ。
そんな時だ。
赤毛の魔法使いと、姉さまと同じ雰囲気を纏った見た目同年代の少女に出会ったのは。
崖から落ちる私の手をそれより小さな手のひらが？む。

……

「何故助けた。化け物で殺人者である私を何故？」

自分は吸血鬼だから、と卑屈になる私に彼女は。

「吸血鬼だから如何した？エヴァが今までやったことは凡て、自己防衛の筈だ。
戦争などに参加した時も結果として多くの人を救っている。戦場で人が死ぬことによって救われる命もあるんだ。そんな人を何故恐れ、避けなければならない？
それに殺人者？そんなの俺だって戦争に参加したことがある。そこでたくさんの人を殺した。
それでも、それでもだ、それで助けることができた命がある。
だから俺はけっしてそんな殺人が正しいとは言わないが間違いだとは思えない」

といった。姉さまと同じ、そう思った。

口調も何も違ったけど。

雰囲気が同じ彼女の言ったことは、
姉さまと同じだった。
しかし、すぐに彼女『コクロウ』は居なくなってしまった。
彼女よりも目立った赤毛の男を私は追った。
考えてみれば、姉さま以外の人に興味を持ったのは初めてだった。
けれど、極東の島国で、追う事も出来なくなった。
その後、麻帆良に縛られている間もジジイに二人の情報をリークさせた。
そして5年目、赤毛が死んだという情報を聞いた。
8年目、
コクロウが、
赤毛の息子を守って
石となったと
聞いた。
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

すいませんすいませんすいません。
頭痛がひどく、自分でも何を書いたのか……。
いつか此処の話をちゃんと書くかもしれません。
エヴァとテオの性格が違います。
というかテオの性格がわかりません。

誤字脱字・矛盾点のご指摘お願いします。

解説　と言うより整理　陸話のネタばれ

わかりにくい、という指摘があったため書きました。

しかしこの話は自分でもよくわからない結果となっていたことを
此処でお詫びします。

すいませんでした。

此処の話はが外伝か何かで書くかもしれません

ネタばれあり。

エヴァのいつもは見つけることも云々は
記憶操作の影響で、『パーティー』に参加していないことへの
不信感が消えた事への影響と考えてください。

エヴァの姉さま云々も同じです。
エヴァの中では、これが日常です。

真祖化についてはミズキがエヴァとともに術にかかればいいので、
短く纏めようとしたようです。

誕生日から凡てが狂った云々は
本編に必要ないと思われる日々、１４００~１９００年ごろをカット
した結果です。
タケダソウカクは実在した武闘家で、
エヴァの言う『ちんちくりんのおっさん』の事です

ミズキと別れる事で反対していたエヴァがすぐに意見を変えたのは、
作者の文才のなさの所為です。

永恆涅吉狂熱云々はコクロウ＝ミズキについてと、

性格の変化、さらに時間移動についてです。

『Ｓｉｄｅ　コクロウ』は過去へ行きミズキと名乗っていたはずのコクロウのその後？です。

アルの伏線？の回収とストーリーの進行も兼ねています。

あれからも色々な事が云々はエヴァと別れたミズキのその後です。

それからコクロウがダウンしていてもしっかりとストーリーには関わります。

『そして終わらせよう』では魔獣を殲滅できたらな～と思い書きました。

『Ｓｉｄｅ　ナギ』ではナギがミズキを見てどう感じたのかです。

我々は再び云々はアスナ救出が何時なのかわからなかったので無理やりつなぎ、

京都行きとスクナ封印、デートにミズキを参加させて

その後のマギステル・マギの活動とエヴァおっかけフラグをたてました。

そのあとはナギ死亡をやってからネギ、故郷襲撃をおこして

ついでに邪魔なコクロウを消しました。

んで、紛い物だったコクロウは何を思いながら散って行ったのかです。

ネギの村襲撃を防げなかったミズキは何を思うのか、です。

最後にコクロウを失ったテオと姉がいなくなりさらに助けてくれたコクロウまでいなくなったエヴァは何を思うのかです。

此処からはいつも通りで……
すいませんすいませんすいません。
次からはこのようなことがないようにしますから
なにとぞこれからもよろしくお願いします。

誤字脱字矛盾批判感想お待ちしております。

第漆話　本編への扉　マジック×スクール×サイエンス

まあ、やっぱり適当ですね。
これを読んでくれている皆様に多大な感謝を。

「で？つまるところナギの息子が来るから此処で補佐しろと？」
現在私はぬらりひょんの前に居ます。
もっとわかりやすく言うならばアレ、１時間目にネギ君がアスナに連行されたあそこです。

「そうじゃ。」

「なんで私がそんな事。此処にはタカミチやエヴァがいるはずだし、そもそも私はエヴァに会いに来ただけだよ？」

まぁ、エヴァの呪いはバッチリ解く心算だけどね。

「そこを如何にかして欲しいんじゃよ。タカミチ君は今、西との調整で忙しくての。

それにエヴァはネギ君の事をよく思っていないじゃろうからの」

「あ～、ネギの所為で『英雄コクロウ』が死んだと思ってるからな～」

実際は私が間に合わなかった所為で『俺』は死んだんだけどね。

「どうせお主はばらす心算はないんじゃろう」

「そのとおり。まあ仕方がないからいくつか条件を出していいなら受けるけど…」

「聞こう。条件はなんじゃ」

「一つ目に魔法先生への事情説明。それに伴い攻撃に対する正当性を認めること。

二つ目にネギに正体をばらさない事。とくに私がコクロウだという事はアルやタカミチぐらいしか知らない筈。……まあテオは気付けた筈だけどね。

仮契約カードもまだ生きてるだろうし、あのカードには遠距離召喚の術式が入っているからそれをすればいつでも。

ここ5年間は無理だったけど事件から1年ぐらいは平気だったはず。

っと話がずれたね。兎に角ネギや魔法先生たちにばらさない事。
三つ目に私の使う魔法、とくに時間系に関してをばらさない事。
このくらいかな」

「よかろう。そこで提案なんじゃが、２－Ａに生徒としてはいらないか？」

「なんで？」

「警備員より生徒と言う立場のほうが何かと動きやすいだろうからの」

「ん～ＯＫ。でも編入は四ヶ月後、四月にしてね」

「なぜじゃ？」

「どうせ其の頃にエヴァを大きく動かす心算でしょう。
まあ１０月頃から準備はしてたんでしょうけど」

原作で面白くなる時期なんて言えないしね。

「そうじゃが…なぜわかったのじゃ？」

「独自の情報網」

「まだわしの中で考えていただけなのじゃが……まあ良いじゃろう。
今夜七時に世界樹広場に来てくれ、みなに紹介する」

七時か。

「ねえ妖怪。その時にちょっと演出をしてもいい？」

「どんなものじゃ？」

「それは……」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

その夜７時

Ｓｉｄｅ　刹那？

さっき学園長から緊急収集がかかった。
今すぐ世界樹広場に関係者は集合、と。
急だったので事情はよくわからないが、
新しい協力者を紹介するとのことだ。

「すみません、学園長。遅くなりました」

広場にはもう他の魔法先生や魔法生徒たちが集まっていた。

「よい。…それでは新しい協力者を紹介するぞい」

「ですが学園長。その協力者と言うのは今どこに？
見たところ此処には我々のほかには誰もいないようですが」

「そう慌てるでない、ガンドルフィーニ君。まずは彼女について知っておいてもらおうと思う」

「彼女と言う事は女性ですか」

「そう、タカネ君の言うとおり彼女は女性じゃ。しかし人間ではない。」

人間ではない？それは私のようなものということか？

「そそ、そそれって…ゆ、ゆ」

「佐倉君。幽霊が協力者になって如何するのじゃ。……協力者は真祖じゃよ」

「ちょっと待ってください！学園長！！現在確認されている吸血鬼は此の学園に居る闇の福音（ダーク・エヴァンジェリン）のほかには……まさか！！」

なっ！エヴァンジェリンさんが吸血鬼？それにそのまさかっていうのはいったい！？

「そのまさかじゃよ。…そろそろ出て来てくれんかのう」

学園長が斜め後ろの空（クウ）に向かって杖を突き出す。
其の杖が空中で不自然に止まり……

「あっちゃ～ここだってバレてたか。巧く隠れてたつもりなんだけどなあ」

「「「「「「「なっ！！」」」」」」」

侵入者！？

でもあの制服はうちの中学の……。

「貴様！！どうやって此処に！」

「どうやってって最初から此処に立ってたんだけど？」

私には虚空から突然現れたように見えたんだけれど…。

「お前は奴の姉！！最凶の種族である貴様が何故此処にいるのだ」

「いや、だからさっきから学園長が説明してんじゃん？」

「やはり貴様が……」

「うん。そのきょーりょくしゃってのが私だよ」

この人が吸血鬼？

なんだかずいぶん軽そうな人だけど。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ミズキ

あのとき学園長室で提案したのは、まずは認識阻害と気配遮断を使って隠れ、
その後魔法先生を軽く揄というものだ。

結果はまあ予想通りの人物ガンちゃんが引っ掛かってくれて、
それを砂鉄の剣（サンドスチールソード）（仮）＋自己流雷光閃モドキで受け流したり、
学園長がフォローしたり、学園長が説明したりで、
最後に

「ミズキ君にはある仕事に就いてもらうので邪魔しないようにしてくれな」

「だいじょうぶだよ～。４月まで私は消えてるから。じゃあね～刹那」

という風なやり取りをして、私は魔法関係者の前から姿を消した。

「リ・ラク・ラ・ラック・ライラック
『猫のピートを知ってるかい？
彼が探しているものを知ってるかい？
正解の扉は一つ。
扉を探して、彼を夏へと導こう。
Ｌｕ　Ｄｏ　Ｒｅ　Ｍｕｓ，　Ｌｕ　Ｄｏ　Ｒｅ　Ｍｕｓ，　ＢＯＯＳＴ！』！！」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

すいませんすいませんすいません。
主人公の行動によくわからないことがいまだに多いです。
さらにガンちゃんとタカネの口調がよくわかりません。
情況描写・心理描写・戦闘描写、どれを取っても苦手です。
……アレ？ここはピートじゃなくてラベンダーじゃね？

誤字脱字矛盾批判感想お待ちしております。

最後に改めて、この作品を読んでくださっているあなたに最高級の感謝を！！

……今回の元ネタわかる人いるかな？

――

主人公設定　更新履歴　修正済み（前書き）

４月１９日　修正

主人公設定　更新履歴　修正済み

Ｎａｍｅ：コクロウ（黒狼　瑞希）
年齢：享年１６　大戦時７
身長：元１６５ｃｍ　大戦時１１０
性別：女
属性：闇
二つ名：「千の呪文（サウザンド・スペル）をもつ少女」「闇の天使（ダーク・エンジェル）」
詠唱キー：ド・ゴム・ラ・ゴドム・ソーゴドム
【容姿】
白髪紅眼　エヴァにそっくり
２か所で一つに髪を纏めている
ｎｅｏ０１のエヴァのようなゴスロリ（？）

【身体能力】
筋力：Ｂ（Ｓ）
耐久：Ｂ（Ａ）
俊敏：Ａ（ＥＸ）
魔力：ＥＸ
生命；Ａ
（）内は気・魔力で強化した場合、咸卦法なら上二つもＳ

【特殊技能】
・肉体変化（メタモルフォーゼ）
肉体年齢を変える。大戦時のデフォは７歳。

・魔眼
物の解析・魔術のコピーができる。

・気・魔力・咸卦法・体術全般
気と魔力世界最高ランクの１０倍程度＋咸卦法＆中国拳法

・術式再現
超電磁砲とか使えるかもしれない。
魔法以外の特殊技も是。

・超葱拳
・永恆涅吉狂熱（エターナル・ネギ・フィーバー）
・
・涅吉超大光波（ネギカイザー）
・すごいパーンチ
そんなある日、彼は目にしてしまった。
『すごいパーンチ！』
本物の超能力を。

・魔術知識・魔術作成など
新しい魔術の研究・開発。
（例）大地の怒りなど

【仮契約】
主１：テオドラ
名前：ＣＯＣＵＲＯ　ＭＩＺＵＫＩ
称号：ＡＢＡＮＤＯＮＮＥＲ　ＬＵＳＯＲＡ（自由奔放な遊び人）
色調：Ｎｉｇｒｏｒ（黒）
徳性：ｓａｐｉｅｎｔｉａ（知恵）
方位：ｃｅｎｔｒｕｍ（中央）
星辰性：ｎｉｇｒｕｍ　ｆｏｒａｍｅｎ（黒い穴）
アーティファクト：絆のメモ帳

・絆のメモ帳
形状は手帳。中には仮契約カードの複製が入っている。
知っている味方のアーティファクトを模倣する。
攻撃をされた場合（攻撃系に限る）や3回以上見ればコピーも可能。
また、天狗之隠蓑など非戦闘系は知っていればコピーできる。
（カードはアーティファクトのみ描かれ、人物はかかれない）
形状は手帳。中には仮契約カードの複製が入っている。

この場合の模倣とは、効果のない見た目だけのものや効果の薄いものになることを指す。
（例）ハマノツルギはただの剣（前者）　匕首・十六串呂はまっすぐしか飛ばないもの（後者）になる。

増えれば順次追加を予定

ネタばれ

どうして、ミズキがいるのにコクロウはエヴァと対なのかというと、
ミズキがあまりに強すぎて一時期その名も禁忌とされていたのと
ここしばらくはエヴァが目立ち、ミズキは目撃されていなかったから。

第壹話　日常一反転　それでも日常　修正済み（前書き）

修正点特になし

第壹話　日常一反転　それでも日常　修正済み

みぃ君が×んだ。

みぃ君が×されて×された。

いつもと同じ帰り道。

ひとつだけ違うのは、みぃ君と一緒じゃないこと。

明日のデートでは何を買ってもらおうかな、なんて考えてた。

そんな私の頭に響いてきた車のクラクション。

瞬間、呼吸　止まって。

怖い、逃げなきゃ、早く、でも、体が、動か…

「危ない！！」

彼が走り寄ってくる。

突き飛ばされた。

え？

そんな、嘘、だよね。

トラックが。

××君を。

×してた。

辺りに飛び散り、広がる紅い血血血血血血血血血血血血血血血血血

「み、い、君?」

ねぇ、何か言ってよ。

「みぃく、ん………ぅぁあ、あ、あ、あ″あ″あァあアア″ァァ嗚嗚″呼″あ″あアァ嗚ぁ―――――――!!」

第壹話　日常一反転　それでも日常　修正済み（後書き）

すみませんすみません本当にすみません。
何か書きたくなって書きました。
誤字脱字などおかしいところがあれば連絡ください。
作者は心理描写や戦闘描写が苦手です。←致命的

第貳話　日常一反転　非日常　修正済み

何処(いずこ)とも知れぬ闇の中、少年は目を覚ます。

「……知らない天じ……ょうどころか何も見えない、か」

目を覚ました俺が見たのは『闇』だった。

何もない無の空間にただ一つ俺が浮いている。

「いや」

違う。

足元に鎌を持った幼女がいた。

『……ません』

何だコイツ。

『…ません、……ません、…みません』

何を言っているんだ？

「なぁ、おい」

『…せん、ひゃぁっ！』

こえをかけたらおびえられたぜＨＡＨＡＨＡ……そうか。

「何をそんなに謝っているんだ？」

とりあえずもう一度声をかける。

『怒ってませんか？』

何をだ？一応言っておく。

「怒ってないぞ、だから謝る理由を教えてくれ」

『じゃ、じゃあ理由を聞いても怒らないでくださいね？』

だから何なんだろう。

「大丈夫だ。怒らないから」

そう言った途端に彼女は突然元気になって、

こうのたまいやがった。

『えっとですね、私のミスであなたが死んでしまいました！』

は？イマ、コイツ、ナンテ、イッタ？

『テヘッ☆』

ブチッ。

何かが切れる音がした。

やつの首を絞める。

「俺にはまだやりたいことがあったんだ！あいつとの約束もあったんだぞ！それを、お前は……」

オマエハ……。

いや、

それでもこいつは謝っていたんだ。

『ミス』がどんなものか聞いてからでもいいだろう。

「なあ、ミスって何なんだ？」

やつの首を話してそう問いかける。

『ケホッ、ケホッ、急に性格が戻りましたね。まぁ説明するとですね……

幼女の話を要約するとこんな感じだ。

本当はあの時ひかれるのはもともと俺で、そのあと奇跡的に助かるハズだった。

たがこいつが俺の彼女と俺の名前を逆に処理してしまい、結果アイツがひかれそうになり

それを助けようとした俺は死んでしまったということらしい。

複雑だな。

「じゃぁアイツは無事なんだな」

そう確認する。

『はい、あの子はかすり傷で済んでますよ』
そうか、
「良かった」
思わずつぶやく。
『優しいんですね』
俺が？まさか。
「何を言っているんだ？俺はお前の首を絞めた男だぞ？」
そんな俺のどこが優しいというんだ？こいつは。
『それでもです。』
生き返らせろとかの前に人の心配をし、『やること』もその人との約束なんて
、とこいつは続けた。
ん？チョットまて。
「いま生き返らせるといったか？」
『はい、言いましたよ～』
と、いうことは
「俺を生き返らせてくれ。さっきも言ったがアイツが待っている」
俺はそう願うが
『それはムリですね～』
なぜだ？なぜムリなんだ。
『えっと、状況を説明しますと潰れて、ナポリタンとケーキを混ぜた感じになったあなたの死体のそばにあの子が座り込んでいる状況ですね』
化〇語か？
『躰がトマトなことになっているとも言いますね』
やめてくれ。そして地の文に返さないでくれ
『とまあそんなワケで、あの状態の死体が動き出したらホラーですよね』
まぁそうだよな。
「それじゃあなんで俺は此処にいるんだ？」

『それは……』
幼女は鞄をゴソゴソとあさり、
パンパカパーンｏｒたたらたったた～
『転生契約書～♪』
とＣＶ，大山のぶ代風にいった。
「……転生？」
そりゃ面白そうだ。
『はい、ミスをしたお詫びに別世界に転生できます』
「…賄賂？」
俺にはそう聞こえたが…
『ち・が・い・ま・す！お詫びです』
そうかそうか、賄賂か。
「ところでその賄賂で何ができるんだ？」
『だからお詫び…まぁいいか、ハァ』
ふっ、ついに諦めたか。
『説明すると、それにサインすることで転生できます♪』
「ふ～ん、じゃあこの『望み』っていう欄はなんだ？」
気になったところを聞いてみる。
『それはですね、１つだけなんでも望みがかなうというものですよ～♪』
そうなのか、じゃあ…
「死ね」
『ハイ？……ってムリムリそれはムリですって～！』
やっぱり、しかしなんでもって言ったのに…。
「なら５個ぐらいに増やせ」
『え、いや、１つだけ……「ここで大声出したらお前の上司来るかなぁ？」
「お前のミスについてうっかりバラしちゃうかもなぁ」
上司云々ははったりである
「そしたらお前の立場はどうなるかなぁ？」

『上司』を思い出したのか幼女は顔面蒼白になってゆく。…おもしれえ。
『うぅ、わかりましたよう。5個でいいです』
うん最初からそういえばいいんだ。
「じゃあ俺の願いは……」

『ではいってらっしゃ～い♪』
願いを決めた俺へと笑顔でそう告げた幼女の顔がブレ、
いや俺自身がブレ……

落ちた。

「なんでこうなるんだぁーーーーーーーーー！！！」

そういえばあの幼女は天使か死神だったのだろうか。

第貳話　日常ー反転　非日常　修正済み（後書き）

はい、もうワケがわからないです。
すいません、ほんとすいません。

第参話　落下一激突　大爆発　修正済み

おっす、変なバカ幼女の所為で死んでしまった元不幸な少年黒狼瑞希だ！
現在絶賛紐無的急降下中だ！（中国風☆）
え？そんなことより『元』な理由を説明しろ？
そうだな、あれは暗き暗き闇の中だった……

「俺の願いは……これだ！」

1，魔力・気・咸卦法・体術全般によるチート化（ネギま前提。契約書に書いてあったから）
2，肉体変化
3，魔眼
4，術式再現
5，魔法を中心にいろんな知識

『う～ん』
幼女は俺の願いを聞いて唸り声を上げる。
思わず抱云々は割愛する。
「どうした？ダメなのか？」
『ち、ちがうよ！でもこれはかなり制限がつくけどいい？』
ああ、使えるなら何でもいいさ。
「平気だ。制限ということは一応平気なんだろう？」
『うん♪じゃぁ、どんな感じになるのか発表しまーす♪』

1，魔力・気・咸卦法・体術全般によるチート化は気は無尽蔵ではなく、体重も中国拳法のみ。
2，肉体変化は性別の変化はできず、年齢・髪程度しか変えられない。
3，魔眼は解析・模倣
4，術式再現はできたりできなかったり
5，魔法を中心にいろんな知識はＯＫ

『っとまあこんな感じです♪』
う～ん何か微妙なのもある気がしたがこれでいいな。
『あっ、あと瑞貴君には女の子になってもらいます♪』
は？ちょいまて
「それはどういう…」
『理由は、新しく作るからだがそのほうが作りやすいのと女性のほうが強い魔力に耐えられるように作れるからだよ♪』
そういうわけなら…
「ならそれでいい、か。だけどその体っていうのはどんな感じなんだ？」
『姿は白髪紅眼、容姿はエヴァちゃんに似てる感じだけど年齢とかはどうする？』
「そうだな……よし、年齢は７歳程度で服装はｎｅｏ０１のエヴァ、髪は邪魔になるから後ろで纏めてくれ。」
『はーいＯＫで～す。それからそれから、必要最低限のものはこのポシェットに入れておきましたからね♪』
「ありがとな！」
『ではいってらっしゃ～い♪』

俺へと笑顔でそう告げた幼女の顔がブレ、
いや俺自身がブレ……
落ちた。

……と、まああのバカ幼女のおかげで俺、いや私？
やっぱ俺でいいか。は女体化した上で絶賛落下中です。
よし落ちる間にもう一度姿を確認だ。
……顔は見えないけど髪は白くなってる。
服も黒いものに変わっているし、ちゃんと7歳ぐらいの姿になっている。
ポシェットに入っているコインなら超電磁砲も撃てるだろう。
戦闘の中に落ちたりした時のために一応準備しておこう。
『食事中失礼！』
ん？なんか下の方から声が聞こえるなぁ。って此処じゃぶつかる！
『俺は放浪の傭兵剣士！ラカン・ジャッ「「ドゴォォウウン」」
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

あの日は各自好きな材料を持ち寄り、詠春お得意の鍋を食すことになったのですが……。
その内容を音声のみでお送りいたしましょう。

「おーいみんな！ちゃんと材料持ってきたか？」

「オウ！俺はその辺で狩ってきた大トカゲの肉だ！！」

「私は新鮮な有機栽培の野菜を持ってきました。この、今朝採れたての葱なんか鍋にはぴったりですよ」

「葱かぁ。俺、葱は食えるけど芯はだめなんだ、芯は。あっちぃしな」

「ちなみに俺は最高級の豆腐ってやつを持って来たぞ。これは旧世界でもヘルシーな食材として親しまれている」

「わしは其処等に生えていた茸を持ってきた」

「よし。なかなかいい食材が揃ったな。では、ここからは旧世界随一の料理人、詠春にお任せあれぃ！」

「フフフ、此の鍋ってやつたまんねぇんだよなあ」

「おいナギ！前にも言ったが肉を先に入れるなよ！」

「へいへい、分かってますよ料理人詠春様」

「フフッ、詠春のように鍋にうるさい人間を日本では『鍋将軍』と言うそうですね」

……

「ああ～、我慢できねぇ！えい！」　ポチャン！！

「「あ」」

「肉を入れてしもうたのぉ」

「ナギ！おまっ、何肉を先に入れてんだよ！！あれほど言っただろう！」

「い～じゃねえか。食いたいもんから先に入れりゃあよう！」

「じゃあ私も」　ポチャン

「ではわしも」　ポチャン！

「だからもぉ～！！って、なんか変な茸浮いてるし！！鍋にはそもそも火の通る時間差というものがあって…」

「こりゃぁ旨いや！」

「うむ。実に旨いのぉ」
「やはり鍋は最高ですね」
「って何処がだ！！俺の大事な鍋を滅茶苦茶にしやがって……クウゥゥゥゥゥ！」
「泣くなよ詠春」
「これが泣かずに居られるかぁ！！」
「のぉ詠春。旧世界の寿司ってやつはないのか？」
「え、寿司？」
「詠春のことですから抜かりはないでしょう」
「もちろんだ！ちゃんと鮮度のいい魚を持ってきてる。魔法世界じゃ生で食える魚は貴重だからな！」
「お、これだな」　ひょい
「それは…」　ポチャン！
「ってあぁぁぁぁぁあ～！！寿司を鍋に入れるなあぁぁぁぁぁ！」
「ハァ？何で入れちゃいけねぇンだ？」
「いまのは生食用って言ってなぁ、生でも食える鮮度のいい魚なんだよう！！」

「うるせえなぁ、何だって良いだろ食えりゃあ」

「そうそう、其れで良いではないか」

「でも、さすがは生で食べれる魚。鍋に入れてもおいしいですね」

「うむ。最高じゃ」

「って貴様らってやつぅぅぅ…ウゥゥゥゥゥ～」

「さあ、詠春もあったかいうちに食え」

「うぅぅぅぅ、ぅぁあぁぁぁぁぁ～！こうなったらやけ食いだぁ！」

と、まさに詠春が鍋に箸をつけようとしたその時。

ドガッシャ～ン

「な、なんだ！？」

「食事中しっつれ～い！俺は放浪の傭兵剣士！ラカン・ジャッ「「

「あ」」」

どごぉぉぉぉぉぅん

あたりに轟音が響きわたりました。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

おれは最強の魔法使いナギだ！
今日は詠春のトコの料理『鍋』とかゆーのを食ってたんだけどよ、
いきなりどでけえ剣がとんできてよぉ詠春に鍋がのっかってんの。
おもしれえこともあるもんだよなぁ。
んで、とんできた方向から声が聞こえてきてさ、
「食事中失礼～～ッ俺は放浪の傭兵剣士！」
とかいうわけだよ。
案の定詠春がきれて立ち上がったところで、
今まで以上におもしれえことが起きたんだよ。
何だと思う？
それがなぁ、
お師匠さん曰く『バカ』が名乗ろうとした途端に、
あのバカ、空から降ってきたガキにつぶされてやがんの。ハハッ、
いい気味だ♪

しかし、

次の瞬間俺の笑いは止まった。

やつが始動キー無しで唱えた呪文、それは

「うわぁっ『百重千重と重なりて（ヘカトンタキス・カイキーリアキス・）走れよ稲妻（アストラプサトー・）千の雷!!（キーリプル・アストラペー）』」

俺が苦労して覚えた上位呪文、

『千の雷』

だった。

Side out

はい、絶賛落下中だった瑞希です。

あのあと押しつぶしたはずのラカンが跳ね起きてさ、

あんまり驚いたもんだから

「うわぁっ『百重千重と（ヘカトンタキス・カイ・）重なりて（キーリアキス・）走れよ稲妻（アストラプサトー・）千の雷!!（キーリプル・アストラペー）』

『来たれ（アギテー・）深淵の闇（テネブラエ・アビュシィ・）燃え盛る大剣（エンシス・インケンデンス・）闇と影と憎悪と破壊（エトインケンディウムサキニス・ウンブラエ・）

イニミーギナ・スウィルチタ・オィーオ・エスニス・
復讐の大焔！！
インケンダント・エト・メー・エト・エウム
我を焼け　彼を焼け
シント・ソームル・インケンデンテース・
そはただ焼き尽くす者
インケンディウム・ゲヘナエ
奈落の業火！！！！『っと！」

って感じでナギとラカンの最強呪文を唱えたらラカンが吹っ飛んじゃった。テヘッ。

……なんか俺性格変わったなあ。まあ性別が変わったんだけどさ。

そしてまあ何だかんだあって、ラカンが仲間になったぜ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

呪文を食らったラカンが復活するあたりからもう一度暫らく音声のみでお送りします

「なにすんだテメェ！」
「いきなり跳ね起きるのが悪い！」
「なんだとぅ、やるか？」
「受けて立つぜ！」
「へっ、標的はこいつ等だったがもう如何でもいい。女だからって容赦しねえぜ！」
「おっ！なんだなんだ？面白そうじゃねぇか。俺も入れろよ」
「おいナギ！」
「いいじゃねぇか、鍋将軍だって鍋のことで怒ってただろ？」
「それはそうだが…」
「オイオイ来ねえのか？それじゃ、こっちからいくぜ『羅漢適当に右パンチ！！』」
ドゴォォォォウン
「いよっしゃ、のってきたぜ！『千の雷！』」

ズズゥゥゥン
「二人とも五月蝿いっ！『超電磁砲！』」
パリパリパリ、ピシューーゥゥン、……ズドォゥゥゥゥン。

……
「お前すげえな。俺はナギ！お前俺たちの仲間にならないか？」
「いいぜ。俺はコクロウだ。」
「俺はラカン。依頼なんてどーでもいい！面白そうだから俺も一緒に行くぜ！！」
「オウ！よろしくな！コクロウ、ラカン！」
「（さっきまで戦っていたのに何なんだこいつらは。特にこのコクロウと云う奴）」

こうして紅き翼のメンバーが増えていった。

「そうだ！ナギさあ、俺に魔法教えてくれよ」
「お前、さっき千の雷つかってなかったか」
「あれはおどろいておもわず叫んだらできたんだよ
その証拠にその次に使った超電磁砲は魔法じゃないぞ」
「わかった。お師匠と一緒に教えるぜ」
「ありがとな！」

Side out

そしていろいろあってやってきましたグレートブリッジ奪還作戦！
俺たち、特に戦線からはずされて鬱憤が溜まっていたナギは暴れに暴れた。
ラカンの斬艦剣が敵を墜とせば、ナギの雷が薙ぎ払い、
そして俺の氷が押し潰す！（魔法使えるようになりました。）
そんなこんなで俺たち紅き翼は戦線復帰とともにその名声を世界に轟かせた！！
（此の戦いでの戦いぶりから闇の天使（ダーク・エンジェル）と呼ばれるようになるが、
此処では割愛する。）

その後も暴れまわったおれたち赤き翼だが、
ガトウやタカミチが仲間になり、少年探偵団の活躍によって秘密結社完全なる世界の存在が明らかになったことにより大変なことに巻き込まれてしまう！！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

第参話　落下ー激突　大爆発　修正済み（後書き）

すいません、本当にすいません。
ナギとかの性格よくわかりません。
千の雷がナギオリジナル云々、修正しました。
戦闘描写とか苦手なんで紅き翼の活動とかも削りました。
それからラカンですが何度も戦わずに、ナギとコクロウの強さをみて一度で仲間になりました。

鍋の時ガトウとタカミチいなかったんですね……
途中で気づいて書き直したため、違和感が残りました。
おもにガトウ⇒詠春・ゼクト　タカミチ⇒アル　です。

第肆話　襤褸小屋ー錬金　仮契約　いちおう修正済み

「ガトウやタカミチなどを仲間に加え、
大陸各地で活躍していった紅き翼、
やってきたのは連合首都
引き受けたのは協力要請
そして日常と戦いが並行する日々。（都合によりほぼカットし次へ進みます）
黒き翼ーＡＬＡ　ＮＩＧＲＡー始まります」

「コクロウ。お前は誰に向かって話しているのだ？」
「コクロウに何を言っても無駄ですよ、詠春。」
む？失敬な、アル。
これでも生前は聞き分けの良い子として通っていたんだぞ。
…嘘だけど。
「そんなことより首都まで呼び出した要件を言えよガトウ」
「そうだな、確かにコクロウにかまっている暇はなかったな」
ちょ、詠春。それはヒドイって。
「あってほしい人がいる。協力者だ」
「協力者？」
お、この流れは…
『そうだ』
「マクギル元老院議員！」
「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」
やっぱり…そして現れるのは……
カッ　カッ　カッ
白いローブを翻らせ、一人の女性が近づいてくる。
「ウェスペルタティア王国……、アリカ王女だ」

こうして、冷血王女の協力要請を受けた紅き翼だが
マクギルを殺してなり変っていたフェイトの罠にかかり英雄から一転、
反逆者という烙印を押されてしまい逃亡生活に入った。
そんな中、首都に残してきた冷血王女が攫われたという情報を得る。
当然俺らは救出に向かった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

今からおよそ１０年前、はじめは辺境の些細な争いだった連合と帝国の戦いは
徐々にその規模を拡大していきました。
そんな中、我々紅き翼（アラルブラ）であるナギ・ラカン・詠春・ゼクト・ガトウ・タカミチ
そして私アルビレオとコクロウは完全なる世界、コズモエンテレケイアに攫われてしまった、
アリア姫を救出すべく夜の迷宮、ノクティス・ラビリントゥスへと向かったのです。

バギッ、ドガッ・グワッシャァァァァァン

「よおっ、来たぜ。姫さん」
「テオドラもいるな？」
テオドラ？帝国第３皇女でしたか、しかしなぜ此処に。
「遅いぞ我が騎士」

「ミズキか？……いや、なんでもないのじゃ」
ミズキ？まぁ今はアリカ姫がいただけで良しとしましょう。
「へっ相も変わらず可愛げのねぇ姫さんだぜ」
「とか言いつつもこの餓鬼ったら、お姫様が心配で「急げ急げ！」ってうるせぇのなんの！」
「よけいなこといってんじゃねぇ」　バキッ
「ってぇなこのぉ！」
「ああん？やんのかコラァ？」
とめた方がいいかと思い声をかけようとすると…
「此の愚か者が！」　パンッ！！
「ってぇ～」
アリカ姫の一撃がナギの頬に…あれは痛そうですね。
「痛がっている暇があるのじゃったら、とっとと私を抱えて逃げるのじゃ！」
「へぇへぇわかりましたよ。逃げりゃあいいんだろ逃げりゃあ」
あのナギが言うことを素直に聞くとは、やはりすごい人ですね。
「へっ千の呪文の男も、姫さんにかかりゃあ形無しだな」
「まったくじゃのぅ」
「一先ず王女殿下。我々の隠れ家へ」
「フム」
「テオドラ…長いからテオでいいや。も行くぞ」
かくして我々は、アリカ姫を紅き翼（アラルブラ）の隠れ家へとお連れしたのです。

「ミズキ、何処かで聞いたような……？」

Side out

「なんだ、これが噂の『紅き翼(アラルブラ)』の秘密基地か！
どんな所かと思えば…掘立小屋ではないか！」
「逃亡者に何期待してんだ、このジャリは。というか何でこいつも居るんだ」
「ヘラス帝国第三皇女テオドラ、アリカ姫との交渉のため出向いて来た所を捕縛されたようです」
「何だこの筋肉達磨！無礼であろう！」
掘立小屋ねぇ。確かにそうとしか見えないんだが。
『へっへ～ん、こちとらヘラスの皇族には貸しはあっても借りはないんでね』
ナギたちが誓いの儀だかをやってるからその間に作り直してみるか？……。
…まずは術式再現の錬金術で作りかえるとして……
『何ぃ？貴様何者だ！』
……魔法っぽくするために「リ・ラク・ラ・ラックライラック」を付けて……
…呪文は適当なこと言えばいいか……
……そうだ！どうせなら『アレ』やって一度ぶっ壊すか。
そうと決まれば……
「お～いテオ、ラカン。ちょっとこっち見ろよ！」

「貴様も無礼であろう！！」
というテオのセリフは無視(スルー)しました。
だがどうしてテオは俺のしたの名を知ってたんだ？

Side out

ラカンと皇女のやり取りを見ていると突然コクロウがラカンとその頭に乗っていた皇女に呼びかけました。さて、面白そうなので私も見ていることにしますか。
「いくぞ！よーく見てろよ！！」
そう言ってコクロウは我々の小屋のほうを向き……
『涅吉（ネギ・カイザー！！）・超大光波！！』
ずどおぉぉぅぅんん
…全身からビームを放ちました。

Side out

「ハッハッハー！どうだラカン。これが俺の実力だ！！」
……あれ？反応がないな。やりすぎたか？
「いえ。皇女に首を絞められて気絶しただけです。まぁ皇女のほうは驚きで声も出ないようですが……」
ちょっ、お前は読心術師か！？
「顔に出ているだけですよ。それより今のは……」
そんなにわかりやすいか、俺。まあいい説明してやらないこともないからな。
「あぁ、今のはだな…「おいっコクロウ！我々の拠点に何ということを！」
詠春五月蠅いな。
「すまんアル、説明は後だ。…なあテオ、どんな家がいい？」

詠春は無視してテオの希望を聞く。
「そうじゃなぁ……。城じゃ、妾は城がほしい！……だが其れを聞いて如何するのじゃ？」
そうか、城か。それならレーベンスシュルト城あたりでいいか。
「こうするのさ！いくぞ！！『ド・ゴム・ラ・ゴドム・ソーゴドム来たれ土精風の精、集い来たりてわれに従え、レーベンシュルツ！！』」パンッ
呪文は適等だが最後に手を打つことを忘れない。すかさず地に両手をあてて……

ど～ん

「出来たっ！」
見事なレーベンシュルツ城だ。うん。
今度こそどうだ、とテオを見る。
「……す……」
「す？」
また声が出なくなっているみたいだな。
「凄いのじゃ！！本当に城ができたのじゃ！」
「どうだ詠春、これで文句なしだろう？」
言葉を失っている詠春を振り返る。
「……い…」
「い？」
お？何だ？
「いいわけないだろう！！この馬鹿が！！！」
「なんでじゃ、そちはこれでは不満なのか？」
本当に不思議そうにテオドラが言う。
「違いますよテオドラ様。ただ……」
「逃亡中なのであまり目立った行動はできないのですよ。と、いうことでコクロウ。

ぼろ小屋とまでは言いませんがせめて家サイズに戻して下さい」
笑顔で言うアルだが目が笑ってない。とても怖い。
「仕方がないな。……ほいっと」
「あぁぁ～」
とても残念そうなテオ。やめて！そんな目でこっちを見ないで！
「大丈夫ですよテオドラ様。一緒に居ればまた作ってくれますよ」
「そうか……決めたぞ！コクロウ。妾とぱくてぃおーするのじゃ」
はい？
「なんでさ…？」
思わず呟いてしまった。
「仮契約すれば守らなくてはいけなくなりますからね。そういうことでしょう」
「アルは黙っててくれ」
そういいアルは睨みつけておく。
『あぁっ、上目ずかいに睨みつけてくる少女！いいっ！！』
とか聞こえてくるが無視する。
「で、そういう事なのか？テオ」
「うぅ、……そうじゃ」
う～むアルの気持ちが分かった気がするがこの状況では分かってはいけないのだろう。
「あぁ～まぁ何だ、ずっとは一緒に居られないがいいぞ。それに城ならいつでも作ってやるからな」
「ほんとかっ！」
「ああ、だから仮契約は…「そうか。なら早くやるのじゃ！！」
……。
「如何したのじゃ？」
「もう諦めたらどうです？コクロウ」
「ハァ。よしテオ、やるか」
もう如何にでもなれ、だ……。

Side out

『……達磨！無礼であろう！』

「あのやけに元気な餓鬼がそうか」
「はい帝国の皇女様です。ナギさん」
俺の呟きにはタカミチが答えてくれた。だが…
「さん付けはやめろっていつも言ってんだろうが」
「す、すみません」
まぁ今はそんな事よりも是から如何するかが問題だな。
「おい姫さんやぁ、連合にも帝国にもオスティアにもあんたの味方は居ねぇ。どうすんだ？」
「そうか。……我が騎士よ、」
「だぁらその【我が騎士】ってのはなんだよ」
それに俺は【魔法使い】だぞ。
「連合の兵でない主は最早私のものじゃ」
な……
「世界全てが敵、じゃが主と主の仲間紅き翼（アラルブラ）は無敵なのじゃろう。いいではないか」
「あ、あぁ」
するとニヤリと笑い姫さんは続けた。
「対する我らは８人、じゃが千の呪文に千の刃、シンメイリュウ、そして何よりあの闇の福音（ダーク・エンジェル）と並ぶ小さき魔法使い闇の天使（ダーク・エヴァンジェル）がいるんじゃ。だれにも負けはせぬじゃろう」
へっ、コクロウが一番強いような言い方は気にいらねぇが、
「そうだ。俺ら紅き翼は無敵だぜ！」

「ならば我らが世界を救おう！」
「「「なっ！」」」
「我が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ！」
…やれやれ、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。だが、
「いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」
姫さんが剣（つるぎ）を俺の肩に置く。
さあ！これから反撃開始だぜ！！

第肆話　襤褸小屋ー錬金　仮契約　いちおう修正済み（後書き）

すいませんすいません。
書いていたらアルが壊れました。
相変わらずキャラのしゃべり方とかおかしいです。

黒「逃亡者として追われるナギたち。
新たに加わったアリカのもと、紅き翼たちはどんな活躍をするのか。
刮目して次回を待てい！」
詠「だからおまえは何を言っているのだ？」

第伍話　大戦ー大技　竜息　修正済み（前書き）

タイトルは『たいせんーおおわざ　りゅうのいき』と読みます。

タイトルが早くもネタ切れだ……

だれか燎に文才を！！

第伍話　大戦ー大技　竜息　修正済み

我々紅き翼(アラルブラ)が目的を再確認したその夜、
コクロウを除くメンバーたちは皆何故か眠る気になれず、取り留めのない話を続けました。

此処からは音声のみでお送りします。

詠春　「にしても、アリカ王女も俺たちも帝国と連合両方を敵に回してしまったな」
タカミチ「僕たちに、勝ち目はあるのでしょうか」
ナギ　「ヘッ、勝ち目も何も、俺たち紅き翼(アラルブラ)は無敵だろ？」
アル　「フフッ、さすがはナギですねぇ。…しかし今度の戦いばかりは我々も苦戦を強いられるでしょう」
ゼクト「何せ黒幕には完全なる世界(コズモエンテレケイア)が控えておるからのう」
ガトウ「ということはこうして穏やかに過ごせるのもこれが最後かもしれないな」
ナギ　「辛気臭いこと言ってんじゃねぇよ！…けどお前ら、もし明日死ぬとしたら最後に何ししてぇ？」
ラカン「ハァ、何言ってんだオメェ」
ナギ　「いやぁ、俺なら何するかと思ってな」
アル　「たしかに明日死ぬとしたら最後に何をしたいでしょう？」
一同　「「「「「「「う～ん（む）」」」」」」」
ナギ　「と、いうわけで『もし明日死ぬとしたら何をしたいですか～』のコーナー」
ラカン「って小学生かお前は」
「というかコーナーって何だコーナーって」
ナギ　「いいんだよぉっ、たのしければさ。じゃぁまずは詠春か

らな」
詠春　「え」
ナギ　「さ～て、もし明日死ぬとしたらお前は何をしますか。ハイ答えた！」
詠春　「あぁ～、そ、そうだなぁ。俺なら多分最後の瞬間まで剣の腕を磨いているだろうな」
ナギ　「マジかよ」
ラカン　「これだから生真面目剣士はよォ」
ゼクト　「詰まらぬ男じゃのう」
詠春　「じゃぁ～、お、お前らは何すんだよ」
ナギ　「アル。お前は？」
アル　「そうですねぇ～。私なら…ハハハ、秘密です」
ナギ　「ってイミわかんねぇ」
ガトウ　「というか、気になる」
タカミチ　「気になりますよねぇ」
ラカン　「ちなみに俺はナギとどっちが強いか決着付けてぇ」
ナギ　「へっ、ど～せ俺が勝つに決まってんだろ」
ラカン　「こんガキャ～！だったら今すぐ勝負するかぁ？」
ナギ　「望むところだ」
タカミチ　「チョッ、ちょっと待ってください」
ナギ　「おっ、どうしたタカミチ」
タカミチ　「その～……ハッ、ちなみにナギさんなら如何するんですか？」
ナギ　「え　？」
ゼクト　「そうじゃのう」
アル　「聞きたいですね」
ガトウ　「言いだしっぺが答えるべきだな」
詠春　「ほ～ら～、何をするんだよナギ」
ナギ　「う～ん」
アル　「ハハハッ、いわずとも顔に書いてあります。ズバリ、あ

なたはアリカ王女とデートしたいんですね？あの時の約束のように」
ナギ　「なっ！テメェなんでそのことを！つーかどこで聞いたんだよ！」
ラカン　「ハッハッハ、やっぱオメェお姫様のこと好きなのかぁ。ありゃいいオンナだからなぁ？」
ゼクト　「ちなみにナギは姫と姫子ちゃんを連れて、三人で京都に行くつもりじゃったらしい」
ナギ　「そーそー、ってお師匠まで！何で知ってるんだよぉ！」
詠春　「ハハッ、京都かぁ、なるほど。それで俺に見どころをいろいろ聞いてたのか。貴様がお寺に興味を持つなど、おかしいと思ってたんだ」
アル　「ナーギー、私たちの目が節穴だと思ってたら大間違いですよっ」
ナギ　「ち、ちげぇよぉ。俺はただ…」
ラカン　「なんだいいわけか？」
ナギ　「くぅっ、俺は！姫さんも姫子ちゃんもずっと王宮しか知らなくて、窮屈な生活を送ってるから…なんつぅか…たまにゃー外の世界も見せてやりたいとか思っただけだ！」
一同　「「「「「……………（え）…………」」」」」
ゼクト　「愛、じゃのう」
タカミチ「えぇ、ナギさんって実は優しいんですねぇ」
ナギ（15）「うっせー！大人をからかうんじゃねぇ！このっこのっ！」　バシッ　バシッ
タカミチ「や、やめてくださいよぉ～ナギさん」
ナギ　「こんにゃろ～」　バシッ　バシッ
タカミチ「ギブ！ギブ！」
アル　「まぁ～でも、誘ってあげればきっと喜ぶと思いますよ。アリカ姫」
ナギ　「え」
詠春　「ホントに京都に来るなら、案内してやるぜ」

ナギ　「お、おう」
ラカン　「でもよォ、万が一お前が死んだらお姫さん悲しむだろうなぁ」
ナギ　「どうだかな。あの気の強いお姫さんのことだ。涙一つ流さないんじゃ……」
???　「誰が気の強い女じゃ？」
ナギ　「って、ぎぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ――――」
ラカン　「噂をすれば…」
タカミチ　「アリカ姫のお出ましだ！」
アリカ　「ハァ、だいたいお主たちは此のようなときに何を下らぬ話をしているのじゃ！そんな暇があったら少しは体を休めんか！」
ナギ　「ってゆーか今の話聞いてたのか…」
アリカ　「聞こえたのじゃ」
ナギ　「聞いてたんだろーが！」
アリカ　「聞こえてしまったのだと言っている」
ナギ　「きたねーぞ！盗み聞き！！」
アリカ　「盗み聞きなどしておらぬ！」
ゼクト　「また始まったのう」
アル　「お二人は本当に仲良しですねぇ」
ガトウ　「ハァ、寝るか」
アル　「そうしましょう」

こうして我々紅き翼はその翌日から戦いの日々に突入したのです。

そのご我々は敵だと判断したものを倒していき、そうこうしているうちに徐々に味方も増えていきました。
そしてコクロウ曰く『映画なら3部作単行本なら14巻分はいくであろう』6ヶ月間の死闘のすえ、雑魚たちを蹴散らし敵の本拠地が王都オスティア空中王宮最奥部「墓守人の宮殿（ノクティス・ラビリントゥス）」であることを突き止めたのです。

しかしこのコクロウという少女、出会う前にも一度どこかで見たことがあるような気がするのですが……。まあ、今考えても仕方がないでしょう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「不気味なくらい静かだな」
「ええ、ですが油断はいけませんよ？」
「そんくらい分かってるって」
今俺たちはラストダンジョン「墓守人の宮殿」の前に居る。
戦いの前の最後の準備ってわけだ。
「ナギ殿！」
ん？この声は確か
「セラスか。準備はできたのか？」
「ハイ。帝国・連合・アリアドネー混成部隊、襲撃の準備が整いました」
「そうか、これで…」
「あっ、あの！」
「どうした」
「サ、サインを頂けないでしょうか！？」
「ああいいぜ、それくらい」
サインをしてセラスに渡してやる。
職権乱用？俺はそんなの気にしないぜ。
「それじゃ行くか！！」
「あ～ナギちょっといいか？」

なんだよ？コクロウ。いいところを邪魔しやがって。
「今回俺は中には入らないからな」
「どうしたんです？コクロウ。あなたらしくもない」
「いや、今回はちょっとヤバい気がするんでな」
「おい！コクロウテメェ逃げるのかよ！」
ラカンの言うとおりだぜ！何で一緒に居かねぇンだ？
「落ち着いてくださいふたりとも。おそらくコクロウは…」
「アルの言いたいこと。多分其の通りだ」
どういうことだ？
「さっきも言ったように今回は何か起こるかもしれない。だから混成部隊は温存しておきたいんだ」
「つまりコクロウが自動人形や悪魔たちを抑え、セラスさん達は万が一に備えるということですよ」
「それに闇の天使（ダーク・エンジェル）の所以となったアレや絆のメモ帳で何処まで再現できるのかも見たいしな」
「そうか。じゃあコクロウ、頼むぞ！
よぉし野郎ども！いくぜ！！」
「セラスさん。そういうことで頼みます。」

Side out

よし、ナギたちは行ったな。こっちも始めるか。
「鳥狗解放」
一言呟く。
すると、俺の背中から黒い翼が生えてくる。
これこそが闇の天使の所以だ。
通常魔法使いが飛ぶときは身体強化で跳ぶか、杖などで飛ぶかのど

ちらかだ。
前者の場合は足場がなければ戦えず、後者の場合はバランスの問題で戦いにくい。
だが俺の鳥狗解放は鳥族の翼に狗族の力を加えることにより飛行・攻撃・防御を同時に行えるようになっている。
そして、
「来たれ(アデアット)」

Side out

ナギ様も凄いがやはりこのコクロウという少女も凄い。
ナギ様たちが飛び出した後、少女の背中から黒い翼が生えてきた。
そして飛び立った少女は……
「涅吉光波(ネギビィィムッ)」
……目からビームを放った。

それだけでも十分恐愕ものなのに
さらに少女が続けて詠唱を始めたのは
「ド・ゴム・ラ・ゴドム・ソーゴドム
『百重千重(ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・)と
重なりて(アストラプサトー・)
走れよ稲妻』
「あ、あれはナギ様の!?」
『千の雷(キーリブル・アストラペー)!!』
サウザンドマスターの代名詞ともいえる千の雷だった。
驚きで声も出ない私。その攻撃で敵の一部が消し飛ぶ

だが彼女の攻撃はまだまだこれでは終わらない。
彼女が次に放ったのは、
「『斬艦剣！！』」
ラカン様のアーティファクト、『千の顔を持つ英雄』を使った斬艦剣でした。
……

もう何も見なかったことにしましょう

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

……

「『燃える天空！！』……チィッ、やっぱり数が多すぎる。仕方がないここはアレを使うか」
確かやり方は、

「右手に魔力左手に気、合成！　ド・ゴム・ラ・ゴドム・ソーゴドム！

『四元の精霊、光闇（こうあん）の精霊二百柱

集い来たりて我に従え！』

攻撃を止めた獲物（エサ）に悪魔が殺到する。

『炎よ！槍となりて敵を貫け！』

火蜥蜴の群れが辺りを焼く。

『水よ！霧となりて敵を欺け！』

攻撃の対象を見失った悪魔は混乱する。

『風よ！突風となりて敵を払え！』

戦女神たちがそれを吹き飛ばす

『土よ！壁となりて敵を阻め！』

岩の塊が辺りを飛び交う。

『開け！聖ジョージの聖域！』

空中に巨大な魔法陣が浮かび上がる。

『闇よ！凡てを飲み込む絶望となれ！』

空間に亀裂が入り闇がのぞく。

『光よ！凡てを照らす希望となれ！』

陣の中心に光が集まる。

『【神よ何故私を見捨てたのですか？】

神殺しの竜の吐息（ドラゴン・ブレス）！！』

亀裂から漏れだす紅き光と陣の中心の白き光、そして其れを飲み込む冥き光。

三つの光が俺の前方に伸び……悪魔を喰らい尽くした。

よし！ほとんど潰したな。

あとはタイミングを待って…

ずぅぅぅぅぅん

うん、ナギたちは創造主を倒せたようだな。

それじゃ最後の仕上げだ！！

「いくぞっ！『永恆涅吉狂熱（エターナル・ナギ・フィーバー）！！』」

そして爆発が辺りを包みこみ……意識を手放しそうになる俺が最後に見たのは

俺を吸い寄せる闇の狭間と、敵のいなくなった空だった。

第伍話　大戦ー大技　竜息　修正済み（後書き）

すいませんすいませんすいません。
やっぱり文を書くのは難しいです。

技説明
・鳥狗解放
肉体変化で翼と狗神を作り出す。
狗神を込めた羽などで攻撃。

・神殺しの竜の吐息（ドラゴン・ブレス）
元ネタは禁書目録。
前半は、呪文で防衛を行いつつあふれた魔力で陣を描く。
後半は、竜の吐息のための呪文（オリジナル）

次は第参話を書き直す予定。
誤字・脱字・批評などありましたら……

第閑話　大戦一終結　主役側（前書き）

読む必要は特にないです。

第閑話　大戦ー終結　主役側

『ははははははは、私を倒すか人間それもよかろうッ』

『だが、ゆめ忘れるな』

『全てを満たす解はない。貴様も例外ではない』

「グダグダうぅるせぇぇッ！」

「人…間を…なめんじゃ…ねえぇぇぇーッ！！！」

ズド…ゥン！

……ドンッ！！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『貴様には結局何も変えられまいよ』

『英雄よ、貴様も我が２６００年の絶望を知れ』

フォッ……

「グ…ぉ…お師匠…」

「師匠ォおおぉおぉ――――ッ」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「まさかあのゼクト殿が逝ってしまわれるとは…」

「コクロウも帰って来ませんでしたしね」

「アイツが死ぬわけねぇと思ってたが……
まぁ戦争だしよ他にも大勢死んだ」

「いや、お師匠は…」

「ナギ」　ポンッ

「死んだ奴らと世界の平和に……」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

こうして戦いは幾多の罪のなき民の犠牲と幾多の名もなき兵、
そして紅き翼（アラルブラ）のゼクトとコクロウの犠牲の上に終結しました。

紅の翼戦記
ＡＬＡ　ＲＵＢＲＡ　ＳＡＧＡ
ＥＰ１　完全なる世界の野望
＜了＞

＞ｉ６００３－９７４＜

いや、続くよ？

第閑話　大戦一終結　主役側（後書き）

すいませんすいません。
めちゃくちゃ短編です。
誤字脱字・矛盾点などありましたらズバズバとご指摘ください

第陸話　エピローグにかわるプロローグは絶望の中で。　修正済み（前書き）

修正しても大筋は変わりません。

第陸話　エピローグにかわるプロローグは絶望の中で。　修正済み

Ｓｉｄｅ　？？？

さて、此処はエヴァが暮らしていると思われる城の前。
どうやって介入する？
キャプテン！！教えて！
『考えろ。考えるのだ。さすれば理想郷（アルカディア）に辿り着けるだろう』
了解です！

……（思考中）

……（思考中）

……（思考ｔｙ「閃いた！」

そうと決まったら早速眼鏡を作って……。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　エヴァ

ねえさまはどこにいるんだろう？
わたしはいまパーティのとちゅうでぬけだしたねえさまをさがして

います。
このあたりにいるとおもうんだけど……
「あ！」
あそこでひかってるのはねえさまの…
ねえさまはっけん！
「ねえさま～！！」　ぴょ～ん！
みつけられたことがうれしくておもわずだきついてしまいました。
いつもはみつけることもできないから。
「如何したの？」
「どうしたのじゃないよ、ねえさま」
そりゃあねえさまはいつもぬけだしているからきにならないのかもしれないけど。
「きょうはわたしたちのたんじょうびパーティーだよ。ねえさまもいっしょにいこうよ！」
「誕生日……そういえばエヴァは何歳になったんだっけ？」
「１０さい！…ねえさまとわたしはちょうど２さいちがいだよ？」
どうしてわざわざかくにんするんだろう？
「１０歳。……そうだったね。じゃあ行こうか」
「うん！！」
でもそんなぎもんはすぐにきえてしまいました。

Ｓｉｄｅ　ミズキ

結局認識阻害と（自作認識阻害眼鏡－対術者魔力隠蔽用－と）記憶操作を組み合わせてエヴァの姉ということにして介入した。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

私を探しに来たエヴァに連れられパーティに出席。
予想通りというか何というか、飲み物に薬が入っていたらしく二人仲良く眠ってしまう。
そして目を開くと……

「気分はどうですか？ミズキ様、エヴァ様」
「やはり貴様か」
昨日私たちに飲み物を進めてきた男だ。あの時点で少しは怪しいと思っていたが…
「はて、何のことやら」
こいつがエヴァを…
「一つ確認させてもらう。私たち二人を真祖にする儀式を行ったのは貴様か」
「…ッ！……ええ、そうです。お気に召しましたか？」
ああ
「最高だよ」
「そうですか。それは良かった。では…」
「だが貴様は最悪だ。死ね」　ズシャッ
エヴァを真祖にした、奴の体を切り裂く。
「エヴァ。起きて。逃げるよ」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　エヴァ

きっとあの誕生日から凡てが狂ったのだと思う。

ミズキ姉さまと私はあれから世界中をめぐった。
姉さまは凄い。
超電磁砲をはじめとして、錬金術・空間転移・瞬動・中国拳法・高位呪文・時間移動（仮）、さらには数百年前に私が編み出した闇の魔法まで使いこなしてみせた。
そんな私たちは、
ときに正義としてときに悪として、様々な戦争（暇つぶし）・紛争に参加した。
その結果、私には６００万ドル姉さまには１０００万ドルの賞金がかけられた。
それでも私たちは一度も斃されることなく世界をめぐり続けた。
５０~７０年前には日本へ行きタケダソウカクとかいうへんなおっさんに合気鉄扇術をならった。
その間姉さまとチャチャゼロ、三人でずっと一緒だった
それは確かに楽しかった。
なのに……

「どうしてだ！どうして連れて行ってくれないのだ！！」

「ごめんエヴァ、チャチャゼロ。だけど今回は今までとは違うんだよ。とても危ないんだ」

何故だ？何故姉さまは一人で行くって言うんだ？

「本当にごめん。２５年後。２００２年にはエヴァの居るところに行くから」

「本当だな？」

「うん、約束だよ」

「じゃあ絶対に戻ってきてよ！」

涙を拭いそう約束させる。
姉さまは最後に一つ頷くと何時も出かける時のような優しげな笑顔を浮かべ、

私の前から消えた。

「私たちも行くか。チャチャゼロ」

「ソウダナ、御主人」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ミズキ

エヴァにまた一つ嘘をついてしまった。
これから行く魔法世界はまだ大戦前だし、始まっても向こうの『俺』がいる。
でもエヴァにはまだ早い。
いくら吸血鬼の真祖でも向こうの世界にはもっと危険な奴がたくさんいる。
不意を突かれたらいくら私でも守り切れない。
「ハァ」
思わず溜め息一つ。
あの時、時間移動のためとはいえ最大威力で
『神殺しの竜の吐息（ドラゴン・ブレス）』
『永恆涅吉狂熱（エターナル・ネギ・フィーバー）』」
の連発を行なったのがまずかったらしく、『精神は肉体に引っ張られる』と
いうアレが現実のものとなった。
其れまでは如何やら無意識に魔力で押さえていたようだ。
溜め息の理由はそんな事ではなく、エヴァを守るのではなくエヴァとともに戦えば
向こうでも大丈夫だ。ということを隠し、嘘を吐いてしまったということだった。
是も嘗ての『俺』なら気になどしなかっただろうに……。

「私も弱くなったなぁ」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　コクロウ

「……ん？……此処は…」
何か長い夢を見ていた気がする。
１２歳ぐらいの少女と１０歳ぐらいの少女の二人旅の夢だった。
あの子たちはきっと……
「目が覚めましたか。コクロウ」
「アル？」
「ええ、そして此処はケルベラス無限監獄の近くに建てた我々の隠れ家です」
ケルベラス？じゃあまさか…
「もしかして今は１９８５年だったりするか？」
「その通りですよ、よくわかりましたね。
ちなみにナギたちはアリカ様を助けに渓谷へ向かいました
如何いうことかは省きましょう」
「そうか……２年間で何があった？」

「そうですね。１９８３年　９月２９日（木）
我々紅き翼は帝国・連合・アリアドネーの協力のもと
完全なる世界および創造主の殲滅に成功。
ゼクト殿とあなたの犠牲により世界は救われました。
その後１９８３年　９月３０日（金）連・帝両国が停戦合意して、
離宮島で記念式典が開催されます。同日オスティアが滅びました。
この記念式典にてあなたとゼクト殿を含む４人がマギステル・マギ
になりました。
２ヶ月後アリカ王女が捕らえられ、処刑が決定。其れから2年、今

日が処刑の日です」
「そうだったのか。…だが何で俺は此処にいるんだ？」
おそらくあの夢の中の少女は……俺だ。
「其れはこちらが聞きたいところですよ。
準備が整いさあ出発だというところに突然二年前に姿を消した貴女が現れたんですから。
…其れはそうと貴女、ミズキという名に聞き覚えはありませんか？」
ミズキ・C・A・マクダウェルと夢の中、いや数百年前の俺は名乗っていたな。
「賞金首のミズキ・C・A・マクダウェルのことか？…其れがどうしたんだ？」
「いえ、ただ初めて顔を合わせた時にテオドラ様が貴女のことを「ミズキ」と。
それとまえからどこかで一度見た事が有る様な気がしていましたが最近になってまた彼女の目撃情報が上がっていることから思い出しました。
数年前に見た彼女の手配書に似ているのですよ。貴女は」
「最近になって目撃されたのなら其れは俺じゃないな。おそらくこの2年間の中には俺という存在はこの世の何処にも存在していなかっただろうからな」
多分あの時に俺は過去へ行った「ミズキ」と現代に残った「コクロウ」に分離したんだろう。そして多分俺は二年後の未来へ飛ばされた。
魔力が全く感じられないことから推測するにこっちは本体ではなく、
「ミズキ」が本体なんだろう。
「存在していない？其れはどういう…」
「悪い、何時か話すからミズキが何処で目撃されたのかを教えてくれないか？」
「え、ええ…そうですね。確か公の場に出てきたのは最初記念式典

だったかと。
式場で何度か目撃情報が上がっています。またその後も魔法世界各地に現れ、オスティア難民の救助や支援に当たっています」
「良い奴じゃないか。それ」

賞金首だとは思えない。俺の記憶では7年前にエヴァと別れるとこまでしかないからな。
判断はまだできないがおそらく俺自身ならば何かを守るために戦っているのだろう。
「ええ。げんに彼女は7年前に一度行方知れずになったあと、賞金は取り消されています」
そうだったのか。7年前……夢の中の少女が一人、たびだったのも其の頃だな。

「ふむ、そろそろナギが帰って来るでしょう」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ミズキ

あれからも色々な事が有った。
テオドラにあったり、テオドラに懐かれたり、テオドラの記憶を封じて再び旅に出たり。
大戦の時テオドラの前に再登場したり、驚く顔を見たり、一緒に反魔法場を封印したり。

記憶を操作できるなら茶々丸のように記憶をデータ化・整理できるのでは？
という考えのもと自分の記憶を操作してみたり。

そして現在、ケルベラス渓谷の底にて仮面を着けて絶賛見学中。
あっ、アリカが落ちてきた。
「ナギ、ナイスキャッチ！」
「あんがとよ。……って誰だお前？」
「たぶん……ミズキ？」
「なんで疑問形なんだよ」
コクロウと名乗っていいのか疑問だったから？

「…ナ…ギ？…なぜ主が？」
「は～い姫さんが目、覚ましたみたいなんでとっとと逃げちゃってください！」
「お前一人で大丈夫なのかよ！まぁ、俺も一人で乗り込んで来たんだけどさ…」
「大丈夫、大丈夫♪ナギにできることで私にできないことはないよ」
というかぶっちゃけナギは邪魔なだけなんだよね。
「そうか。そのセリフは気になるが…。よし行くか、姫さん」
「ちょっ、まて！だからなぜ主がいるのかと……」
声が遠ざかっていく。
さらに上から爆音が聞こえるとこをみると
「もう始まってる、か」

よしこっちもはじめて、

そして終わらせよう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ナギ

姫さんを助けに入った時現れた、よくわからない謎の蝶の仮面の女。
魔法の使えない筈のあの谷底で、それでもアイツからは魔力が溢れていた。
渓谷の特性をもってしても抑えられない膨大な魔力。
そんなのは今までただ一人コクロウにしか見た事がなかった。
２年前から行方不明だったコクロウは、今日突然現れた。
姫さんを助けようとする俺たちの隠れ家の前、そこにあいつは倒れていた。
あの時、コクロウの体からは魔力をほとんど感じなかった。
だが仮面の女「ミズキ」から感じた魔力はコクロウのものと全く同じ感じがした。
奴はいったい何者なんだ？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　アルビレオ

我々は、再び彼女を失った。

アリカ様と姫子ちゃんを救出すると、我々は京都へ向かいました。
ナギの希望であった京都でデートと、詠春の頼みであるスクナノカミ封印のためです。
アリカ様救出の折、仲間になりたいと言ってきた仮面の女性ミズキ。
彼女はコクロウを見て一瞬驚いたようだったけれど、それ以外は普通に我々になじんでいました。
ただ、仮面は外してくれなかったのが当時残念ではありましたが。
その後、一時期紅き翼は解散して世界中を回りました。
コクロウとナギがあの闇の福音を助けた時はさすがに驚きました。
その後、闇の福音はミズキがナギに教えた登校地獄をかけられ、麻帆良学園に送られました。

そして１９９３年我々はまずナギを失います。
トルコのイスタンブールへ一人で向かい、そして彼は連絡を絶ちました。
コクロウは魔力のほぼすべてを失っていましたが代わりに彼女しか

扱えない新しい体系の呪文、メラ・ヒャド・ホイミというものなどを使いました。

彼女はナギが失踪すると、すぐにアリカ様の暮らす村へ向かいました。

なんでも災厄の王女の情報がいつ漏れるかわからない、

またもうすぐ生まれるだろうその子供もまた、

英雄の子供ではなく災厄の王女の忌み児という見方をされてしまうだろうとの事でした。

それから４年。

１９９６年冬　雪の日の夜、

あの日我々はＭＭ元老院の依頼で全員が魔法世界側に行っていました。

なにか重要な事を忘れている気がする。というミズキの言葉のもとに我々は村へと急いでいました。

そして

村に到着した我々を待っていたのは、

石化の呪文で足を失ったネカネちゃんと、

ナギの杖を握りしめたネギ君と、

永久石化をかけられたスタンさん達村の人々

そして、同じく石化した

彼女の姿だった。

呆然とする中で、

あぁ、結局後で話すと行っておきながらあの2年間の事、話してくれませんでしたねと、

漠然と

ただ漠然と思った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　コクロウ

自分が紛い物だということには目を覚ましたあの時から気付いていた。
たしかにコクロウとしての記憶はあるがそれでもなんとなく気付いた、気づいてしまった。
なんとなくだったその考えも、あの日ミズキという仮面の女を見たとたん確信に変わった。
ミズキがつけていた仮面、あれは華蝶仮面のものだった。
この時代、いやこの世界にはおそらく恋姫は存在しないだろう。
名前、容姿、仮面。性格は違ったけれど、おそらくアイツは何百年の時を過ごしてきたんだ。変わってもおかしくはない。
だが、其れでも自分が偽物だろうと精一杯やっていくつもりだった。

やっていたつもりだった。

やれていると思っていた。

現実はそんなことはなく。

体が動かなくなっていく中で、『ホンモノ』だったら巧くやっていたのだろうかと

思った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ミズキ

この日のため、この日のために今まで様々な技を駆使して、強くなってきたはずだった。

でも、間に合わなかった。

彼は、『俺』は、すでに物言わぬ石像だった。

身を守るために私は合気道を学んだ。

魔獣に対抗するために魔力を使わない『奇跡』を習得した。

人々を守るために剣を持つ腕を磨いた。

悪魔に対抗するために陰陽道を極めた。

全てはこの日の為だった筈なのに。

私は間に合わなかった。

あろうことか、

ＭＭ元老院の罠に嵌って。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　テオ

コクロウが死んだ。

妾をずっと守り、何時でも城を作ってくれると言ったのに。

何がダメだったのだろうか。

わがままを言った事？

仕事中に飛びついて邪魔してしまったこと？

町に何度も連れて行ってもらい、でっかくなったコクロウのかたに何時も乗っていた事？

わがままがダメならもう言わない。

仕事も邪魔しない。

自分の仕事をちゃんとやって、町にも行く回数も減らす。

だから、

だから、

「妾はさびしいのじゃ。」

「帰ってきてほしいのじゃ」

「コクロウ」

Side out

Ｓｉｄｅ　エヴァ

あれから１９年がたった。
姉さまとの約束まであと６年。
きっと姉さまはこの現状から助け出してくれる。
約束を信じて一人で生きてきた。
でも１０年がたった時私は一度折れかけた。
崖から落ちたのも、その状態の私がぼうっとしていた所為だ。
そんな時だ。
赤毛の魔法使いと、姉さまと同じ雰囲気を纏った見た目同年代の少女に出会ったのは。
崖から落ちる私の手をそれより小さな手のひらが？む。

……

「何故助けた。化け物で殺人者である私を何故？」

自分は吸血鬼だから、と卑屈になる私に彼女は。

「吸血鬼だから如何した？エヴァが今までやったことは凡て、自己防衛の筈だ。
戦争などに参加した時も結果として多くの人を救っている。戦場で人が死ぬことによって救われる命もあるんだ。そんな人を何故恐れ、避けなければならない？

それに殺人者？そんなの俺だって戦争に参加したことがある。そこでたくさんの人を殺した。
それでも、それでもだ、それで助けることができた命がある。
だから俺はけっしてそんな殺人が正しいとは言わないが間違いだとは思えない」

姉さまと同じ、そう思った。

口調も何も違ったけど。

雰囲気が同じ彼女の言ったことは、

姉さまと同じだった。

しかし、すぐに彼女『コクロウ』は居なくなってしまった。
彼女よりも目立った赤毛の男を私は追った。
考えてみれば、姉さま以外の人に興味を持ったのは初めてだった。
けれど、極東の島国で、追う事も出来なくなった。

その後、麻帆良に縛られている間もジジイに二人の情報をリークさせた。

そして5年目、赤毛が死んだという情報を聞いた。

9年目、

コクロウが、

赤毛の息子を守って

石となったと

聞いた。

Side out

To be continued?

第陸話　エピローグにかわるプロローグは絶望の中で。　修正済み（後書き）

すいませんすいませんすいません。
書き直してもテキトーです。
いつか此処の話をちゃんと書くかもしれません。
エヴァとテオの性格が違います。
というかテオの性格がわかりません。

誤字脱字・矛盾点のご指摘お願いします。

解説　と言うより整理　陸話のネタばれ（前書き）

わかりにくい、という指摘があったため書きました。

しかしこの話は自分でもよくわからない結果となっていたことを

此処でお詫びします。

すいませんでした。

此処の話はが外伝か何かで書くかもしれません。

解説　と言うより整理　陸話のネタばれ

ネタばれあり。

エヴァのいつもは見つけることも云々は
記憶操作の影響で、『パーティー』に参加していないことへの
不信感が消えた事への影響と考えてください。

エヴァの姉さま云々も同じです。
エヴァの中では、これが日常です。

真祖化についてはミズキがエヴァとともに術にかかればいいので、
短く纏めようとしたようです。

誕生日から凡てが狂った云々は
本編に必要ないと思われる日々、１４００~１９００年ごろをカット
した結果です。
タケダソウカクは実在した武闘家で、
エヴァの言う『ちんちくりんのおっさん』の事です

ミズキと別れる事で反対していたエヴァがすぐに意見を変えたのは、
作者の文才のなさの所為です。

永恆涅吉狂熱云々はコクロウ＝ミズキについてと、
性格の変化、さらに時間移動についてです。

『Ｓｉｄｅ　コクロウ』は過去へ行きミズキと名乗っていたはずのコクロウのその後？です。

アルの伏線？の回収とストーリーの進行も兼ねています。

あれからも色々な事が云々はエヴァと別れたミズキのその後です。

それからコクロウがダウンしていてもしっかりとストーリーには関わります。

『そして終わらせよう』では魔獣を殲滅できたらな～と思い書きました。

『Ｓｉｄｅ　ナギ』ではナギがミズキを見てどう感じたのかです。

我々は再び云々はアスナ救出が何時なのかわからなかったので無理やりつなぎ、

京都行きとスクナ封印、デートにミズキを参加させて

その後のマギステル・マギの活動とエヴァおっかけフラグをたてました。

そのあとはナギ死亡をやってからネギ、故郷襲撃をおこして

ついでに邪魔なコクロウを消しました。

んで、紛い物だったコクロウは何を思いながら散って行ったのかです。

ネギの村襲撃を防げなかったミズキは何を思うのか、です。

最後にコクロウを失ったテオと姉がいなくなりさらに助けてくれたコクロウまでいなくなったエヴァは何を思うのかです。

解説　と言うより整理　陸話のネタばれ（後書き）

此処からはいつも通りで……
すいませんすいませんすいません。
次からはこのようなことがないようにしますから
なにとぞこれからもよろしくお願いします。

誤字脱字矛盾批判感想お待ちしております。

第漆話　本編への扉　マジック×スクール×サイエンス　修正済み（前書き）

まあ、やっぱり修正はあまり入りませんでしたね。
これを読んでくれている皆様に多大な感謝を。

第漆話　本編への扉　マジック×スクール×サイエンス　修正済み

「で？つまるところナギの息子が来るから此処で補佐しろと？」
現在私はぬらりひょんの前に居ます。
もっとわかりやすく言うならばアレ、１時間目にネギ君がアスナに連行されたあそこです。

「そうじゃ。」

「なんで私がそんな事。此処にはタカミチやエヴァがいるはずだし、そもそも私はエヴァに会いに来ただけだよ？」

まぁ、エヴァの呪いはバッチリ解く心算だけどね。

「そこを如何にかして欲しいんじゃよ。タカミチ君は今、西との調整で忙しくての。
それにエヴァはネギ君の事をよく思っていないじゃろうからの」

「あ～、ネギの所為で『英雄コクロウ』が死んだと思ってるからな～」

実際は私が間に合わなかった所為で『俺』は死んだんだけどね。

「どうせお主はばらす心算はないんじゃろう」

「そのとおり。まあ仕方がないからいくつか条件を出していいなら受けるけど…」

「聞こう。条件はなんじゃ」

「一つ目に魔法先生への事情説明。それに伴い攻撃に対する正当性を認めること。
二つ目にネギに正体をばらさない事。とくに私がコクロウだという事はアルやタカミチぐらいしか知らない筈。……まあテオは気付けた筈だけどね。
仮契約カードもまだ生きてるだろうし、あのカードには遠距離召喚の術式が入っているからそれをすればいつでも。
ここ5年間は無理だったけど事件から1年ぐらいは平気だったはず。っと話がずれたね。兎に角ネギや魔法先生たちにコクロウ云々をばらさない事。
三つ目に私の使う魔法、とくに時間系に関してを説明しない事。
4つ目にアルの居場所を教えること。いまはクウネルだったかな？
まあ、これくらい」

「よかろう。そこで提案なんじゃが、2－Aに生徒としてはいらないか？」

「なんで？」

「警備員より生徒と言う立場のほうが何かと動きやすいだろうからの」

「ん～OK。でも編入は二ヶ月後、二月にしてね」

「なぜじゃ？」

「どうせ其の頃にネギを此処に入れるのと
四月にはエヴァを大きく動かす心算でしょう。
まあ10月頃から準備はしてたんでしょうけど」

原作が始まる時期なんて言えないしね。
「そうじゃが…なぜわかったのじゃ？」
「独自の情報網」
「エヴァについてはわしの中で考え、まとめていただけなのじゃが……まあ良いじゃろう。
今夜七時に世界樹広場に来てくれ、みなに紹介する」
七時か。
「ねえ妖怪。その時にちょっと演出をしてもいい？」
「どんなものじゃ？」
「それは……」
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
その夜７時

Ｓｉｄｅ　刹那？

さっき学園長から緊急収集がかかった。
今すぐ世界樹広場に関係者は集合、と。
急だったので事情はよくわからないが、
新しい協力者を紹介するとのことだ。

「すみません、学園長。遅くなりました」

広場にはもう他の魔法先生や魔法生徒たちが集まっていた。

「よい。…それでは新しい協力者を紹介するぞい」

「ですが学園長。その協力者と言うのは今どこに？
見たところ此処には我々のほかには誰もいないようですが」

「そう慌てるでない、ガンドルフィーニ君。まずは彼女について知っておいてもらおうと思う」

「彼女と言う事は女性ですか」

「そう、タカネ君の言うとおり彼女は女性じゃ。しかし人間ではない。」

人間ではない？それは私のようなものということか？

「そそ、そそれって…ゆ、ゆ」

「佐倉君。幽霊が協力者になって如何するのじゃ。……協力者は

真祖じゃよ」

「！！　ちょっと待ってください！学園長！！現在確認されている吸血鬼は
此の学園に居る闇の福音（ダーク・エヴァンジェリン）のほかには……まさか！！」

なっ！エヴァンジェリンさんが吸血鬼？それにそのまさかっていうのはいったい！？

「そのまさかじゃよ。…そろそろ出て来てくれんかのう」

学園長が斜め後ろの空（クウ）に向かって杖を突き出す。
其の杖が空中で不自然に止まり……

「あっちゃ～ここだってバレてたか。巧く隠れてたつもりなんだけどなあ」

「「「「「「なっ！！」」」」」」

侵入者！？
でもあの制服はうちの中学の……。

「貴様！！どうやって此処に！」

「どうやってって最初から此処に立ってたんだけど？」

私には虚空から突然現れたように見えたんだけれど…。

「お前は奴の姉！！最凶の種族である貴様が何故此処にいるのだ」

「いや、だからさっきから学園長が説明してんじゃん？」

「やはり貴様が……」

「うん。二人目の闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）。きょーりょくしゃってのは私」

この人が吸血鬼？

なんだかずいぶん軽そうな人だけど。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ミズキ

あのとき学園長室で提案したのは、まずは認識阻害と気配遮断を使って隠れ、

その後魔法先生を軽く揄というものだ。

結果はまあ予想通りの人物ガンちゃんが引っ掛かってくれて、

それを砂鉄の剣（サンドスチールソード）（仮）＋自己流雷光閃モドキで受け流したり、

学園長がフォローしたり、学園長が説明したりで、

最後に

「ミズキ君にはある仕事に就いてもらうので邪魔しないようにしてくれな」

「だいじょうぶだよ～。２月まで私は消えてるから。

じゃあ刹那。また会おうね～」

という風なやり取りをして、私は魔法関係者の前から姿を消した。

「リ・ラク・ラ・ラック・ライラック

『猫のピートを知ってるかい？

彼が探しているものを知ってるかい？

正解の扉は一つ。

扉を探して、彼を夏へと導こう。

Ｌｕ　Ｄｏ　Ｒｅ　Ｍｕｓ，　Ｌｕ　Ｄｏ　Ｒｅ　Ｍｕｓ，　ＢＯＯＳＴ！『！！」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

第漆話　本編への扉　マジック×スクール×サイエンス　修正済み（後書き）

すいませんすいませんすいません。
主人公の行動によくわからないことがいまだに多いです。
さらにガンちゃんとタカネの口調がよくわかりません。
情況描写・心理描写・戦闘描写、どれを取っても苦手です。
……アレ？ここはピートじゃなくてラベンダーじゃね？
というかこれだと『ミズキ以外の世界の』じゃなくて
『学園長の』時間が進むんじゃ……。

誤字脱字矛盾批判感想お待ちしております。

最後に改めて、この作品を読んでくださっているあなたに最高級の感謝を！！

……今回の元ネタわかる人いるかな？

主人公設定２　修正後投稿

ネタばれ注意。

Ｎａｍｅ：ミズキ・Ｃ・Ａ・マクダウェル
年齢：享年１６　エヴァの姉時１２　本編１４
身長：元１６５ｃｍ過去１３０　本編１５５
性別：女
属性：闇
二つ名：「闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）」「破壊を招く魔法典（Magi-Lexicon）」
詠唱キー：リ・ラク・ラ・ラック・ライラック

【容姿】
金髪紅眼　エヴァにそっくり
後ろで一つに髪を纏めている
サファイアレンズの伊達眼鏡をしている

【身体能力】
筋力：Ｃ（Ａ）
耐久：Ｃ（Ａ）
俊敏：Ｓ（ＥＸ）
魔力：ＥＸ
生命：ＥＸ
（）内は気・魔力で強化した場合、咸卦法なら上二つもＳ

【特殊技能】
・肉体変化（メタモルフォーゼ）
肉体年齢を変える。本編時のデフォは１４歳。

・魔眼
物の解析・魔術のコピーができる。

・気・魔力・咸卦法・体術全般
気と魔力世界最高ランクの１０倍程度＋咸卦法＆中国拳法

・術式再現
超電磁砲とか使えるかもしれない。
魔法以外の特殊技も是。

・超葱拳
・永恆涅吉狂熱（エターナル・ネギ・フィーバー）
・
・涅吉超大光波（ネギカイザー）
・すごいパーンチ
そんなある日、彼は目にしてしまった。
『すごいパーンチ！』
本物の超能力（レベル5）を。

・魔術知識・魔術作成など
新しい魔術の研究・開発。
（例）大地の怒りなど

・リミッター
自分の魔力を半減させ、術式再現や必殺技系・聖ジョージの聖域等を封印する。
ネギの村を守れなかったミズキはこれを使う。

【仮契約】

主：エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル
名前：ＭＩＺＵＫＩ・Ｃ・Ａ・ＭＣＤＷＥＬＬ
称号：ＡＢＡＮＤＯＮＮＥＲ　ＬＵＳＯＲＡ（自由奔放な遊び人）
色調：Ｎｉｇｒｏｒ（黒）
徳性：ｓａｐｉｅｎｔｉａ（知恵）
方位：ｃｅｎｔｒｕｍ（中央）
星辰性：ｎｉｇｒｕｍ　ｆｏｒａｍｅｎ（黒い穴）
アーティファクト：大魔導書（グラン・スペル・グリモワール）

大魔導書：さまざまな魔法の術式が記録されていて、
其れを読み上げることで、得意不得意に関係なく魔法を放てる。
（ネギま・ゼロ魔・なのはなどはあるが禁書目録はほとんどない。）

増えれば順次追加を予定

第捌話　1時間目　ボケ少年は魔法先生（前書き）

長い。

自己紹介が長すぎる。

第捌話　1時間目　ボケ少年は魔法先生

２００３年　２月上旬　今日は私ミズキ・Ｃ・Ａ・マクダウェルが「今日の学園長室」をお送りいたします。

「学園長先生！一体どういうことなんですか！？こんなのが先生なんて！」

「フォフォフォ良いではないか。アスナちゃんや」

いやぁテキトーに本編開始ごろまで時間を進めたら見事にあのイベント（？）にぶつかりましたよ。

「しかし修行のために日本で先生を……ネギ君も大変な課題をもらったのお」

「しかしまずは3月まで教育実習じゃ。よいな？」

「はい！よろしくお願いします！」

きょーいくじっしゅー以前に労働法はこの世界にはないんだろうか。

「ちょっ、しゅぎょーって……」

「ところで。着任早々すまないが君のクラスの転入生を紹介しよう。ミズキ君じゃ」

「ということでよろしく。少年」

「こちらこそよろしくお願いします」

「ちょっとまって！子供が先生っておかしいじゃないですか！だいたい」

「此の修行は大変じゃぞ、ネギ君。
ダメだったらもうチャンスはない
其れでもやるのかね？」

さすが妖怪。ものっそいスルースキルだ。

「はい。やります。やらせてください！」

「うむ。頑張ってくれな。ネギ君」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『１コちょーだい』
『１コね。オケよ』

『おはよ』
『おーす』

『じゃ、お願いです』
『あいあい』

『ん。きたか』

『クギミーもいらない？１コ１００円ね』
『♪』
『その略やめて～』

『……』
『ｅｔｃ，ｅｔｃ，』
『エキストラ，エキストラ』

どうなってるのよ！突然失恋の相とか言ってきて
しかもあのガキが先生！？まだ１０歳ぐらいじゃないの！
あの学園長め。今度会ったらただじゃ済まさないんだから！

「まあまあアスナ。落ち着いてや～」

「これが落ち着いてられるかっ！だいたいあのガキは！」

ガラガラガラッ

「失礼しまっ」　ボフッ

「「「「「「「……」」」」」」」

「ごほっ。い、いや～ひっかかっちゃったなあ～。コホッ。アハハ」

ガッ

バインッ

「へぶっ！？」　ゴッ

「あぼ」　ガポッ

「あああああああああ～」　パスパスパスッ　ゴガガガガガガガガ

「ぎゃふん！！」　ドンッ！

なに？今…黒板消しが一瞬…。

「え～と。3月までこのクラスの担任をやる

ネギ・スプリングフィールドといいます。よろしくお願いします」

「「「……」」」

「「「「「きゃ～。可愛い！！」」」」」

わ～きゃ～どたばたどたばた。。。

ガッ

「ねえ。いまあんた黒板消しに何かしなかった？
なんかおかしくない？アンタ」

「え…いや……その」

ガラガラッ

「そろそろ私のしょーかいをしてほしいなあ。
なんて思うんだけど？しょーねん。どう思う？」

あいつは今朝の……

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

前も思ったけど少年ってやっぱりバカ？
というか

「なんでこんなトコで魔法障壁はってるかな～。
ていうか自己紹介で魔法を教えるとかいいかけただろ」
とゆーかそろそろ紹介して欲しい。
よし！いくか。
ガラガラッ

「そうでした。みなさん！静かにしてください」

……シーン。
おっ、さすが子供先生。
こういう時だけはなんかみんな言うこと聞くけど最初からだったのか。

「さっそくですが転入生を紹介したいと思います。
名前は……「ミズキ」はいではミズキさん。
自己紹介をおねが」　ガタタッ

「？」

エヴァか。少年は不思議そうにしているけど
確かまだ私の名、ちゃんと名乗ってなかったからなあ。
でもこれだけ似ていれば眼鏡なんて関係なく
名簿見た時に分かると思うんだけど…

「エヴァちゃん？如何したの？」

「ミズキ姉……。」

「あ～エヴァさんや？」

これはちょっと予想外。なんか泣きそうなんだけど。

「２００２年。」

「「え？」」

「２００２年には帰ってくるといったよな？姉さまは」

「そういえばそんな事も会ったような無かった様な」

２か月遅れただけで何？この空気は。誰か助けてよ！

「そんな事よりアンタの自己紹介は如何したのよ」

「そうだな。姉さま、とっとと紹介をして

何故遅れたか説明願おうじゃないか」

一応助かったのかな。

「うん。え～ゴホン。

では改めて。

刹那とエヴァは久しぶり。

他の皆さんは初めまして。

先のやり取りの通りエヴァの姉というものをやっている

ミズキ・Ｃ・Ａ・マクダウェルです。

つきましてはまずクラスメート一人一人に一言言いたいと思います。
」
えっと確か鞄の中にメモが……あったあった。
「何々？『初めまして。
ほとんどの人がそうだと思いますが一応。
まず注意点としては是から此処に記されている事は、
人の名前など間違っていることも多々ありますでしょうが
そこは初対面という事で流してください。では行きます』」
「まず佐々木まき絵。
新体操頑張れとしか言えない。」
「う、うん頑張る。こずえだけど」
「次鳴滝風香。名前違う気がするが姉のほうだ。
こんど実際にデス・ハイクをやってみる？」
「やらないですっ！それから『さゆ』です」
「そうか。じゃあ椎名桜子。
チアリーディング頑張れとしか言いようがね…」
「はあ」
「次。雪城？……ああ、雪広あやか。
明日菜との仲崩さないようにね」
「なぜ此処で其の事を？」

「あ～なんならあの日明日菜の放った『元気出せ』の意味を此処で…」

「ハイ！わかりましたわ！！」

おお、早いな。

「朝倉和美。
これからはスクープにならない事件がたくさん起こるから
覚悟しておいたほうがいいよ」

「スクープにならないって其れは」

「うん次。
出席番号1番相坂さよ。
居るよね？
多分このクラスなら友達が出来るさきっと」

『そそそそれってどういう…』

「またこんどね。」

「ミズキちゃーん。だれと話しているの？」

「釘宮円。桜子に同じ。
桜咲刹那。
木乃香を守りたいんならちゃんとそばにいなよ」

「ハイ。すみません」

「宮崎のどか。
頑張ってね」

「あ、あの。何を…」

「和泉亜子。
保健委員なら血ぐらいで気絶しちゃだめだよ」

「そないなこというても…」

「長瀬楓。
やっぱりじゃぱにーずニンジャはすばらしいな」

「何の事でござるか？」ニンニン

「村上夏美。
千鶴さんにさからわないよーに

「イエス、サー」

「私は一応女なんだけどね。
那波千鶴。
夏美をよろしく」

「わかっていますわ」

「四葉五月。
料理楽しみにしてるよ」

「こくっ」　たのしみにまっててください。

「春日美空。
謎のシスターって実はカッコ悪いんじゃない？」

「ナ、ナンノコトダカ？」

「超鈴音。
計画、今から楽しみだよ」

「何処で其れを知ったアルカ？」

「鳴滝史伽。
デス・ハイクって無理だよね？」

「ソソーデスネ。」　ガクガクブルブル

「ふみも史伽じゃなくってふみだよ」

「そっか。
大河内アキラ。
優しさゆえに苦労する」

「君のいうとおりだよ」

「葉加瀬聡美。
ロボット技術は恐愕にあたいするね」

「光栄です」

「古菲。
バトルはしないよ？」
「やっぱりダメだたカ。強そうなんだけどナ」
「近衛木乃香。
刹那と仲良くね」
「神楽坂明日菜。
家族に会いたくはないか？」
「いるのなら会いたいにきまってるでしょ！
でも高畑先生は……」
「いつか教えてあげるよ。
柿崎美砂。
ある意味天才だね。すごいよ」
「どの意味ですか？」
「龍宮真名。
さよは敵じゃないよ」
「依頼によるな」
「絡繰茶々丸。
万物には魂が宿る。
エヴァをよろしく」
「はい。分かりましたコク「ミズキ」ミズキ様」

「明石裕奈。
父親の仕事内容を知っている？」
「ゆうこ。よくわからないけど何で？」
「長谷川千雨。
おかしいのは此の学園そのものだよ。
君はおかしくなんかない」
「！何故今それを」
「綾瀬夕映。
さすがにポーションは不味いからね」
「そんな飲み物が有るのですか…奥が深いです」
「早乙女ハルナ。
追い詰められた時も冷静なのは素晴らしいよ」
「あまりほめられてる気がしないね」
「ザジ・レイニーデイ。
ナイトメアサーカス見に行くよ」
「……」
「エヴァ。
放課後屋上ね」

「わかった」

「そんな感じです。
色々言いたい事はあるでしょうが質問は受け付けません。
趣味はダンジョンの探検。
いつか図書館島に潜ってみたいとは思いますが
探検部には入りません。
特技は合気道などです。
さっきも言った通りクーや長瀬と戦うつもりはありません
此処の生徒のほかには
警備員や少年の補佐も頼まれてはいますが
授業には極力出ません。
理由は全部学園長の所為という事で。
そんなわけで自己紹介を終えます」

ふう、疲れた。
これから屋上へ行ってひと眠りするか。

ガシッ。
エヴァに捉まりました。ｏｒｚ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

第捌話　1時間目　ボケ少年は魔法先生（後書き）

すいませんすいませんすいません。
ある意味オリキャラとか出しました。
性格とかもわずかに変わっていたりしますので
キャラ紹介出します。

こんな作品を読んでくださる皆様に多大なる感謝を。

誤字脱字矛盾感想批判待ってます。

ものっそいは作者の近辺では普通に使われます。

登場人物紹介　３－Ａとそのた数人（前書き）

なんか新しい人とか作りました。
さゆとさよってにてるよね？

登場人物紹介　３－Ａとそのた数人

３－Ａ

担任　ネギ・スプリングフィールド　（Ｔ・シルバーバーグともいう）
主人公。天才少年。

１　相坂さよ
気弱な幽霊。

２　明石裕子
Ａ組一のお祭り娘。　ボランティア保母さん

３　朝倉和美
パパラッチ。スクープのためなら手段を問わない。

４　綾瀬夕映
理屈屋で勉強嫌い。のどか（２７番）とは親友で恋のライバル。

５　和泉あゆ
関西弁。血を見るのが嫌い。気絶できます。でも一応保健委員。

６　大河内アキラ
長身。寡黙だが世話好き。小動物が好き。

７　柿崎美砂

チアリーダー。Ａ組で数少ない彼氏持ち。

８　神楽坂明日菜
この物語のヒロイン。しっかり者で努力家だが、クラス一成績が悪くそそっかしいところがある。

９　春日美空
いたずら好きで、いい加減なシスター。　謎のシスター。

１０　絡繰茶々丸
ロボット。正しくはガイノイド。Ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ（２６番）の従者。
じつはコイツは貳号。壹号もいる。新ボディはのことを參号という。

１１　釘宮円
チアリーダー。ボーイッシュ。

１２　古菲
中国から来た格闘家。　あるいみ戦闘狂。

１３　近衛木乃香
京都のお嬢様。おっとりしているようで切れ者。　東洋最強。

１４　早乙女ハルナ
同人絵師。噂好き。周囲のラブを感知できる。
小動物といいコンビ。

１５　桜咲刹那
生真面目な神鳴流剣士。木乃香（１３番）とは幼馴染。

１６　佐々木こずえ
　天然ボケ。元気で明るい。　ただのバカともいう。
あれ？ゆーことかぶってね？

１７　椎名桜子
　チアリーダー。強運の持ち主。

１８　龍宮真名
　巫女でスナイパー。

１９　超鈴音
　中国人。万能の天才。本名はリン　・メイファ

２０　長瀬楓
　じゃぱにーずニンジャ。ニンニン。

２１　那波千鶴
　あるいみ大人の女性。年相応に見えないことを気にしている。
気にしているが故に子ども好きなのに保母は目指さない。

２２　鳴滝さゆ
　いたずら好きの双子、姉。強気。見た目は小学生。
ちょっとデス・ハイクやろうか？

２３　鳴滝ふみ
　いたずら好きの双子、妹。弱気。見た目は小学生。
ちょっとデス・ハイクやろうか？

２４　葉加瀬聡美
　マッドサイエンティスト。　天才ともいうかも。

２５　長谷川千雨
　ネットでは人気Ｎｏ１のネットアイドル、リアルでは目立たない。
皮肉屋で人づきあいが悪い。　眼鏡外すとめっちゃ萌え。

２６　Ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ　Ａ．　Ｋ．　ＭｃＤｏｗｅｌｌ
　学園に封印されている吸血鬼。
サウザンドマスターに片思いはしていない。

２７　宮崎のどか
　本の虫。夕映（４番）とは親友で恋のライバル。

２８　村上夏美
　庶民的。そばかすと赤毛でくせっ毛がコンプレックス。

２９　雪広あやか
　委員長。大金持ちでお人よしのお嬢様。
明日菜（８番）の親友。手下をよく従えてるという噂が……。
その中で漢魂（おとこだま）を放つ奴が居るとか居ないとか。

３０　四葉五月
　料理人。温和な性格で人気者。　こあら。

３１　Ｚａｚｉｅ　Ｒａｉｎｙｄａｙ
　無口。えいんちょスキルで会話できるほか、
ちづねえや瑞貴も会話できる。

３２　Ｍｉｚｕｋｉ　Ｃ．Ａ．　ＭｃＤｏｗｅｌｌ
　ある時は少女、またある時は悪の魔法使い、
その実態は英雄コクロウ！

……実は本当に悪の魔法使いだったいする。

その他の人物

霧嶋零
男子中等部の生徒。
ジニーズ三人衆。
１６０ｃｍ。

川崎大吾朗
男子中等部。
ジニーズ三人衆。
１６５ｃｍ。

原口ヒロ
中等部。
三人衆。
１５５。

三人以外にも仲間がいるらしい。

英子
高等部のおねーさま。
先代ウルスラの脱げ女。

トライアングルアタック…

どんな陣形ですの？

登場人物紹介　３－Ａとそのた数人（後書き）

すいませんすいませんすいません。
なんかもうテキトーです。
一部ｗｉｋｉからひっぱってきました。
誤字脱字矛盾感想批判おねがいします。
では、また次回。

謎な伏線（？）を張っておきながらそれと最終回

Ｓｉｄｅ　？？？

『よし、データも取れたしもういいだろう』

真っ白な空間の中少年の声が響く。

『でも本当にいいんですか？』

聞き返す声はどこか懐疑的だ。

『いいんだよ。どうせアレはおれ自身だ。』

『それでも！彼は彼という一つの自我を持っていたのでは！』

二つ目の声の調子が強くなる。

『…この話は終わりだ。後ろの三人！お前たちもそれでいいな？』

どこからともなく答える声が響く。

『……御意』

『まぁ、いいですよ』

『紹介までしたのに出番がないってのが気に食わないんやけどな』

『ということでこの場を終了とする。いいな』

『…はい。わかりました』

…

……

……

空間が、消える。…

To be continued?

「ふぅ、これでよしっと」

パソコンに向かって文字を打ち込んでいた少年が顔を上げる。

置いてあるのはいたって普通の勉強机だ。

部屋の内装もシンプルに白いベッドと本棚、それにカーテンだけである。

コンコン
ふとドアがノックされる。
「タカ君？はいるよ」
「ああ。いいぞ」
タカと呼ばれた少年は椅子から腰をあげ来訪者を迎える。
入ってきたのはタカと同い年ぐらいの少女だ。

「どう？書きあがった？」
「それだけどこれから忙しくなりそうだからさ、
いったん終わりにすることにしたんだ」
「ふ～ん、どんなかんじで終わらせるの？ちゃんと考えてある？」
「うっ。それを言われると…」

「駄目だよ！ちゃんと事情を書いたりしないと」
少女の口調が心なしか速くなる。
「そうはいってもさ、やっぱり難しいんだよ」
「じゃあ私が書いてあげる」
「本当か！？ノゾミ、大好きだ！」
「えへへ～。好きだって言われちゃった」
ノゾミと呼ばれた少女は頬を緩めて喜びを表現する。

「では早速かきまーす」
「頼むぞ！」

「いつもこの作品『ネギま！　黒き翼ーＡＬＡ　ＮＩＧＲＡ－』を読んでくださっている皆様本当に有難う御座います。
長らく更新が止まっていたことをこの場に変えてお詫び申し上げます。
また、この作品の執筆を停止してしまうことをここでお知らせします。
本当に申し訳ありません。
ですが、この作品は次回作の伏線のようなものとして利用する予定ですので詳しくは作品詳細に書くと思います。
これからも『小説を読もう！』をよろしくお願いします」

「これでどう？」
「ああ、ありがとう。
じゃぁ、これで最後の更新をするか」

続くかもしれないけどＥＮＤ

謎な伏線（？）を張っておきながらそれと最終回（後書き）

いつもこの作品『ネギま！　黒き翼ーＡＬＡ　ＮＩＧＲＡー』を読んでくださっている皆様本当に有難う御座います。
長らく更新が止まっていたことをこの場に変えてお詫び申し上げます。
また、この作品の執筆を停止してしまうことをここでお知らせします。
本当に申し訳ありません。
ですが、この作品は次回作の伏線のようなものとして利用する予定ですので詳しくは作品詳細に書くと思います。
これからも『小説を読もう！』をよろしくお願いします。

この小説を読んでくださった方々に無情の感謝を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7271k/

ネギま！ 黒き翼-ALA NIGRA-

2010年10月14日12時56分発行